るにも拘らず、吾が聲に力あると認めらる。新鮮なれば人の注意を引くべく、之れにして眞正の見地ならば、やがて信徒を作り得べし。新見解には贊同反對あるを問はず、兎に角成功せむには、語る人が之れを確信せざるべからず。之れ要點なり。社會は眞正なる物によりて動かさる、たとひ誤謬なりとも、之れを信じて發表すれば、不神聖なる眞理を傳ふるよりも有力なり。

不純にして復た社會の意見嗜好に從順なるは、喝采を受けて暫時の成功を爲すとあり。されど斯かる事實は、予が立てたる原理を傷くるものに非ず。現時には此かる不快なる現象ありと雖も、その爲に迷ふべからず。吾れ等は飽く迄も眞理を愛慕せ

ざるべからず。信せざるとを語り、淺薄の思想を傳へて喝采を博せむとする演說者は、羨むべきものなりや否や。かゝる辨士に對しても、或は傾聽する者もあらむ、其の勞に酬むる者もあらむ、また新聞紙は之れを傳ふべし。されど斯くの如き成功は望ましきものなりや否や。喝采の聲、消滅すると共に、消去するが如き勢力は、吾れ等の欲すべきものなりや否や。誠實の思想を發表したる者は、或は喝采せられざるとあらむ。然れども其の思想は、他の間に傳流して、やがて採用せらるべく、後年には辨士として尊敬せらるゝに至らむ。

著作に於けるも同一なり。自己の思想感情にもあらざる物を、

巧妙に表現すれば、一時の成功を爲し得べしと雖も、軈て秋は來らむ。秋風に凋まざる作は、これ純正の原理を守りたるものなり。

第三節　純正と視力との關係

通俗ならざる說を、露骨に發表せよと薦めたればとて、獨創的といひ、純正といひ、必ず世間と反對すと論結するものに非ざるは、讀者も推知するを得べし。敎理といひ、感情といひ、悉く世間の非難を受くるものにあらざるなり。予の言ふ所は次の如きのみ。心中にては排斥する思想を、信ずるが如くに語ると勿れ。また實際に感ぜざる事を感じたるが如くに發表すると勿れ。こは普通的規則なり。たとひ正直溫良の人たりと雖、往々此の規則を破りて、雄辨法に依りて、雄辨を振はむとする誤解を懷くとあり。これ實に惡文學の生ずる所以なり。宗敎、倫理、政治などに關する思想にして、堂々と傳ふべきものあり。これ先人が之れを斯くの如く發表したるが故なり。偖て此の點は、動もすれば人を惑はしむ。迷へる者は、自身にて其れ等よりも理に適したる思想を懷きながら、而も堂々たらむが爲に、前說を辨護せむとす。燒き直しの雄辨は効果少しと雖も、而も人は之れを廢せざるなり。偉大なる言語は、偉大なる思想より

生じ、熱烈なる言語は、熱烈なる情緒より生ずといふ經驗は、秋毫も彼れ等を敎へざるなり。言語の排置、辭句の妙、辨士の態度身振り等は、模倣し易しと雖も、能辨は之れを模すると能はざるなり。能辨たらむと欲して能辨たると能はざるなり。『たらむと欲する』とが、『巧妙の文』といふ罪惡を生ずる所以なり。こは其れ自身が不健全にして、大思想のためにのみ用ふべき大文字を俗化せしむるのみならず、虛妄の熱誠が宿り易き樣の思想のみを捕へむとする傾向を、益す大ならしむる病毒なり。『巧妙の文』を草する人は、眞實の說たらざる說を常に撰擇す。その文章を作るや、たゞ耳のみを標準として、若しも音韻調はず、

辭句平凡なれば、快々として樂まざるなり。文章は自己の意味を精細に傳ふれば足れりといふ原則は、彼れ等の好まざる所なり。否、彼れ等には、正確なる意義すら在せず。何となれば一思想ありても、之を表はさむとする場合消滅し、文章は思想に依りて制定組織せらるゝとなく、只言語上の綾のみにて作らるゝが故なり。今日の書籍或は雜誌を繙け。記者にして其の言ふ所を意味せざる者あるは、容易に觀破し得べし。これ言語の不完全より生じたる缺點にあらずして、自己の思想に忠實ならず、また頗る不用意に文字を用ひたる病弊なり。

近世文躰の不純正なる、文は精細なるべしと言ふ第一原則を悉

く破棄したり。彼れ等以爲らく、作文とは律音ある辭句の排列なりと。謬見も亦甚しからずや。作文とは自己の胸中に伏在する思想感情を、明白なる標符によりて、讀者に傳ふる術たるを知らずや。忠實ならむとを勉めよ。若しも思想に美あらば、大體は美とならむ、眞の情緒あらば、表現は他人を動かすべし。汝自身の文體を裝飾するとなかれ。汝が見る所を看せしめよ。汝が感ずる所を感ぜしめよ。他人が感ぜしめ、看せしめむと勉めたる所を繰り返へすと勿れ。いかに文章を洗錬したればとて、自身にて看取し、或は感得せざるものは、我れ等を感動せしめざると異りて、質樸なる文體も仍ほ克く異彩を放つとあるは、

吾れ等の經驗する所にあらずや。裝飾を以つて世に向へば、その裝飾のみが吾れ等の注意を引くのみ、老婆が金銀珠玉を以つて裝飾したればとて、吾れは其の裝飾を羨むのみにて、決して老婆其の婦人を美婦とは觀ぜざるべし。

『巧妙なる文』が散文家に對する所は、不純正なる形像が詩人に對すると同一なり。不純正なる形像は、表現のためよりは、寧ろ効果のために用ひらる。眞の詩人には、形像自から生ずべく、また後想として生ずるにもせよ、それ自身が美なるが故にあらず、全く自己の意味を傳ふるに適當なるが故に、選擇せらるゝなり。即ち裝飾品にあらずして標符なり。形像が思考の間

に起ると、或は突如として生ずるとを問はず、そは全く看取せられたるものにして、決して追求せられたるにあらず。劣等の詩人は其の看取したる所に慊焉たらず、何物か異樣の物を揭げ出さむと苦心す。彼れは形像の明確なる者を俟たずして、只管繪畫的ならむとを欲す。眞の藝術家には、緻密なる選擇の才能ありと雖も、劣等詩人には此の才能なく、適當せざるものをも採用し、而して、

金銀を以つて有ゆる部分を蔽ひ
裝飾を以つて自らの無藝を隱す（ポープ）

汝自身の心に忠實なれ。決して他人の思想を表現すると勿れ。

ラスキン曰はく、人ありて、他人が見ざる所に、眞に天使を見たりとせば、彼れをして天使を畫かしめよ。されど天使畫法を學びたりとの理由を以つて、天使を畫かむと欲するは非なりと。これ殆ど自明の眞理なりと雖も、世には天使を描寫して成功したる先輩あるを知り、自身は之れを視もせざるに、天使を描寫せんとする畫家の多きこそ悲しけれ。豈獨り畫家のみならんや。

眞正に感じられ、信じられたるもの、眞に想像的經驗の一部分を成したるもの、即ち他人を模擬したるにもあらず、また苍說にもあらざるものは、世間に附與して適當なるのみならず、其の力は、巧妙に他人を模したるものよりも强大なり。作家が

自身の經驗の一部を作りたるものを發表すればこそ、大なる印象を起し得べしとは推定すべからず、また藝術的表現の方法を缺くも可なりと推論すると能はずと雖も、自身の所有を發表する場合には、他人の說を發表するよりも、其の藝術上の力が强大なると疑ふべからず。エマーソンは此の點を說明したり。何故といふとなしに、人の記憶に存在する事實、言語、人物は殘留す、これ其の人との關係が、密接なるが故なり。それ等は他書又は他心の形像を以つては解說すべからざる一部の意識を說明するが故なり。吾が扉を叩く人は、吾れの注意を引くと、吾が附近を行く人よりも大なり。これ其の特殊の點が吾れ等と關係

あるが故に外ならず。或る逸話、或る性行、風俗、容貌等は、普通の標準を以つてすれば、値打なしとするも、吾れ等には大切なる關係あるなり。かゝる場合には、之れを重要視して、決して排除すると勿れ。

ヲルヅヲルスは詩集の一部に於いて、特殊の形像を作りたる特殊の場合あるとを記述したり。彼れが詩中に表現したる所は、彼れ自身の見たる所なり。これ彼れの詩が、吾れ等を感動せしむる所以なりとす。詩人の表現したる所は、現在の經驗より得たる形像なりや、或は曾つて經驗したる所を記憶して、之れを今の形像と造り上げたるものなりや否やは、尋問する必要なし。

詩人は其の見たる所を表はして、決して尋索するなくして可なり。

自己の經驗に據れとの論は、動もすれば空想的事物の妙處榮光を放棄せざるべからずと命令するが如くに誤解せらるべし。されど前記せるラスキンの說を觀れば、之れを訂正するを得べし。誰人なりとも如何なる點までも其の想像を走らせ得ると、不知火の如く處定めざるも可なり。然れども其の想像が、何物にも因りて動かされざる場合に、不知火の如くならむと衒ふは非なり。惡魔鬼女を、實際に想像せずして、之れを描寫せんとするは愚かなり。斯くの如きものは、詩人的性質ある人にとり

て、初て詩的なり。ラスキン言へり。風土記者たり得べくんば風土記者たれ。自然が其の他の事を意味せば其の方面に行け。されど決して預言者たると勿れ。汝の命ぜられたる所を靜肅に行へば、精靈來つて汝を助くべしと。然り、汝が命ぜられたる所を、誠實の力を以つて爲さむとすれば、成功せむと決して疑ふべからず。然らずんば成功を見るべからず。不純正は決して成功を保證するものに非ざるなり。

不純正を排斥するは殘酷とも見ゆべし。これ一部の記者の効力を鍛ぐものなればなり。能辯なるとを欲するなかれ、心に感じたる所あれば、則ち雄辯を生ずと論ずるは、確かに一部の人

を落膽せしむべし。本來の能力を用ひて、其の以上を衒ふとなかれと論ずるは、小能力を意識する人々にとりては、非常なる打擊たるべく、彼れ等之れがために悲むとあらむ。されど余は言はむ、余は斯かる小作家を捕へて、不純正の擧動に出づると勿れと說諭する者にあらず。彼れ等の業は、如何なる場合にても、決して成功すべきものにあらざれば、余は始より彼れ等一派を眼中に置きて、成功の秘訣を說きたる者にあらず。

余が言ふ所は、青年にして强く、野心ありて熱心なる人々に對してなり。余は彼れ等の眼より霞を拭ひ去りて、直接に眞理を眺めしめむと欲す。吾人は多小に拘らず、思想、感情、又は

文體の上に、不純正の事を爲し易きものなり。他人に賴りて思想文體を作り、或は社會の嗜好に適せむとするは、吾れ等の陷り易き邪道なり。予は若うして强健なる人々に薦む。注意して自身の書く所を檢して、そは自身の意味したる所を表現するか否かを明かにせよ。注意して自身の表現する思想を檢して、そは決して他人のものならで、自身の構成したるものたるを確かめよ。元より他人の思想と一致するともあらむ。然れども決し、て他より補助を仰ぐとなかれ。更に滑稽物或は戲曲を作る場合には、嚴密に自己の思想を述ぶる能はざるとあり。されど尙ほ神聖ならざるべからず。戲曲上の天才は、有ゆる人物と同化す。

即ち其の言ふ所は、其の人物として眞に感ずる所たり。戯曲中の人物として語るは、想像上の眞狀ならざるべからず。自身の意見又は感情を放棄して、全く想像上の人物と同化して、神聖に之れを表現せざるべからず。されど自己の意見を發表する場合には、嚴重に誠實ならむとを守り、心中にて賞せざる物を賞し、胸中にて好む物を排斥し、或は社會と一致せんが爲に、過大の賞讃又は誠熱を示すが如きとあるべからざるなり。斯かる注意は、文學の事をして容易の業たらしめず。されど誰人も知らむ。成功は決して容易の業に非ず。他人が不純正の文字二十頁を書する間に、吾れはたとひ一頁たりとも、純正の文字を綴

れば、これ成功なり。そは眞文學なり。

純正の事たる、効果多く、尊敬すべく、而して世人の思惟するよりは容易の業たり。更に一小例を擧げむ。引用語を爲さむとするに當りて、出所を確實にする能はざれば、これ孫引きなり。余の引用したる所が、多く孫引きならば、余は決して博學にあらず。博學ならずして、博學を衒はむとするは愚かなり。若しも博學にして烱眼なる人あらば、一讀して余の孫引きせるを觀破すべし。而して余の欺き得たる人々は、實際欺くに足らざる者なり。純正愼謹の眞理を知りながら、耻しげもなく孫引きを爲す人の多きは遺憾なり。純正の原理は、引用註釋などの

小事にすら應用して毫も誤なし。況や哲學詩歌等の高尚なる事業に對してをや。

凡そ文字少々の時、須らく氣象崢嶸、采色絢爛ならしむべし漸く老け漸く熟すれば乃ち平淡を造す、其實は平淡に非、乃ち絢爛の極なり。　蘇東坡

第五章　美の原則

第一節　文體の秘訣

前章に說きたるが如く視力の明確なると及び純正たるとに信賴するとのみを以つて滿足すべからず。假令これ等の點に於いて、少しも缺くる所なしとするも、表現の技倆あらずんば、作物は必ず朦朧たるべし。想像的眼識を有し、觀察力を有し、過去の物を現在の如く觀取する人にして、而も其の見たる所を現はすに當りて、失敗するものあり。これ本來其の技倆を缺ける

にあらずんば、不完全なる教育を受けたるが故なり。表現せむと欲する物が、明確ならむとは、言ふ迄もなく視力の明瞭なると、及び純正の原理を嚴守するに本づくと雖も、而も此の以外に、特殊なる狀態を必要とすると、恰も音樂又は繪畫に於けるが如し。如何なる人と雖も、教育を受くれば作し得ると、猶ほ書法を學びたる者の書き得るが如し。然れども巧妙に、また有力に表現し得むには、才能の力に據らずんば能はざるなり。物と物との關係にして、見得べからざるを看取する力と、これを世人に傳ふるに適當なる標符を以つてする力とは、必ずしも相伴ふものにあらざるなり。一方は思索家の能力にして、他方は

作者の力なり。此の兩種の能力は、必ず隨伴するものに非ず。

デクエンシー言へり。文體には二樣の働きあり。第一は理解せむには不明なるものを、明白になすと是れなり。第二には、感官には既に不明となりし物に、舊の力と明瞭なるとを與ふる再建の働き是れなり。漸次に朦朧たらむとする形狀、さては褪せむとする色彩を、再び明確ならしむるが之れなりと。この目的を達する爲には、豐富なる言語の記憶を有して、其の中より讀者の心を最も感動せしむるに足るべき言辭を撰擇せざる可らず。仍ほ之が爲には、纖功なる撰擇の才能ありて、適當なる標符を撰擇し、排列し、而して讀者の心を動かして、作者の意味す

る所を傳へざるべからず。言語上の記憶は、猶ほ事實の記憶の如く、たゞ一部の力を作るに止るのみ。藝術家にして、管理的才能あるにあらずんば、決して効果多き作を出すと能はず。鋭敏なる觀察力ある者は、小數の事實より、推して不可見の關係を抽象し、之れに反してたとひ智ある者と雖も觀察力乏しき者は、之れを爲し能はざるが如く、優秀なる才能ある作家は、小數の言語中より、凡人の企て及ぶべからざる美と力とを彰はすに足るべき標符を撰擇す。作家又は讀者にして、美しき文字は優秀なる作家を造ると思考する人多しと雖も、之れ美色彩は優秀なる畫家を作ると考ふるに異らず。色彩何ぞ大畫家の稱を作

るべき。アーサー、ヘルプス曰く、平凡なる人は、種々の言語を用ひて、其の中の一つが適合せむとを勉むと。これ穿ち得たる語なり。眞の藝術家は、尤も適當なる辭句を知り、之れを撰びて、其の他は悉く排斥す。之れに反して劣等なる作家の通弊は精密ならざる點なり。その標符は、其の思想に適合せず。試に其の文を解剖せよ。言語を濫用し、之れを撰擇するに當りて、曖昧なる言語の聯想に據るにあらずんば、熟知せる語の不完全なる反響を本として、毫もその表現せむとする思想に適したるか否かを考思せざるなり。

思潮の歴史に一變化を與ふるほどの有力なる思索家の場合を

取り除きては、文體こそ作家を有名にし、又其の名を不朽ならしむるなれ。劣等なる例を擧れば、思索の力極めて微弱なる作家たりとも、他人の思想を巧妙に傳ふる術を知れば、名を成し得るなり。之れに反して、思索家としては適當の性を有しながら、表現の法を知らざるが故に、毫も社會の注意を惹起せざることあり。情熱なき智の世界より、情調高き世界に移るに從ひ、また指示の世界より、情緒の世界に移るに從ひて、文體は益す必要となる。されど科學哲學の世界なりとも、決して文體を無視すべからず。此の世界にては、藝術に於けるが如く文字の排列に苦心する必要なしと雖も、仍ほ適宜に標符を排列するは成

功の一因なり。予が先の章にて科學と藝術とを區別したる所より推せば、文體にも抽象的關係を表現する智的と、感情に關係ある物を顯はす情的との二種あるを知るべし。吾人は科學者に向つて、情を激昂せしめよと言はず。吾れ等は、科學的書籍が、新眞理を闡明したりとの從屬的即ち副產的快樂を覺ゆれば以つて足れりとす。科學者は情熱のために、思想を混亂せしめざるやう、注意せざるべからず。元來情熱は盲目的にして、往々知識を紛亂せしめ、而して智は情熱の自由なる發動を束縛せむとす。此の點より見れば二者の區分は不可能とも見ゆべし。されど之れ決して文體差別の根本を破壞するものにあらざるなり。

美の原理とは文體の別名なり。文體は藝術の一にして、之れを說明すると難しと雖も、而も心理的狀態に樹てられたる規則より成るものなり。その規則が批評哲學を成す。予は以下の章にて、之れを科學的に說述せむと欲す。それ等は即ち本論にして、此の章はその緒論と言ふも可なり。さて文體の規則を如何に精密に知ればとて、一作家が必ず巧妙なる表現を爲し得べしとは言ふべからず。これ恰も色彩、遠近法等を知ればとて、批評家が直に畫家たると能はざるが如し。されど佳良なる文章は必ず此の規則に契合し、惡文章は必ず之れより遠かりたるものなり。即ち此の規則を知れば、邪道に迷ふとなかるべし。

文體の必要は衆人の認むる所なるのみならず、遠くはクインチリアン、ロンギナスより現時の評論家に至るまで、之れに關して著述せる者甚だ多しと雖も、而も十分に原則を說明したる者なきは何故ぞや。一には批評家が、文體の眞目的を明白に眼前に置かず、二には其の原則とする物を、心理的狀態より歸納せざるが故なるべし。予の見る所に依れば、彼れ等は、勢力の眞原因を誤解し、原因結果の直接關係を看るとなしに、たゞ偶然又は附屬的細事に留意するのみなり。古大家の美に驚きて、彼れ等は直に結論すらく、シセロの如く書き、チ、アンの如く書くは成功の原因なりと。こは一面に於いては眞理なれど、彼

れ等の意味する所は謬妄なるを免れず。流行病にも等しき傳染性の誤解とは何ぞや。大藝術家が行ひて必ず然りとたしかめたる格言は、即藝術の格言なりと言ふに在り。されど綿密に古大家の作を檢せよ。彼れ等の爲した所は其の個性の結果にあらずんば、其の時代の敎化の結果なり。眞の批評哲學は、これらよりも遙かに普遍的にして、人間通性の規則に本づきたる法則を示し、且つ如何なる點まで、之れを特有の個性に應用すべきかを明かにす。されど人間性に立てられたる規則は、一個人の事業を一例とすと雖も、之れに依りて決して保證せらるゝものにあらず。加之、藝術家にして個性瞭々たる者は、己れに適合す

るやう、此の原則を變形するとあり。何ぞ之れに依りて原則を保證するを得むや。藝術の目的が個人の思想感情を發表するにあれば、所謂『好模範』に從ふは、表現を墮落せしむるに異らざるは明白なり。シセロ又はチ、アンと寸厘の差なく思考し或は感得するに非ずんば、彼れ等に倣ふは非なり。古大家の作に對して、効果の原理を研究して、其の秘密を發くは可なり。然れども模倣すべからざらす。古大家は證典たるにあらずして、唯一例たり。儀型にあらずして研究の題目たり。

第二節　古典の模倣

儀型に依りて文を草するとの誤謬なるとは次の如き簡單なる疑問を掲ぐれば明白なり。古大家の爲した所は、文法上に於ける誤謬、又は論理上の混亂をすら正しとなすものなりや。こは有るべくも非ず。然らば吾人は此の他の普遍的眞理に合一せざるものを承認せざるも、決して不當の處置に出てたるにあらざるなり。若しも一方に於ける理性の混亂の狀を承認すべしとならば、仍ほ他方に於ける誤謬をも承認せざるべからず。吾人にして古大家の作中にある誤謬、即ち普遍的原則に戻りたる點を芟除するに非んば、其の作をして不朽の名を成さしめたる長所を觀破すると能はざるなり。所謂批評は、かゝる點を考慮せざ

るなり。そは心理學的ならずして、形式的なり。そは成功せる作家の作より、格言を引き出したるのみにて、其の作中に、効果を收め得べき心理的原則の含蓄せらるゝを撰定せざるなり。五幕の劇を創始したる古人を非難する作家にして、思想の混亂せるものは、四幕の戯曲を作りて、難局を避け得るを思惟せざるなり。戯曲は五幕なるべしとは、古の大家が、五幕を以つて成功したるが故にして、其の五幕ならでは、決して觀者を動かすと能はずとの心理的原則は存在せざる也。

英國人は、佛人に比すれば、規則に盲從すると無しと雖も、而も先年三幕にして死の無き悲劇の出づるや、こは劇とし

て許すべからずとの反對論出てたり。

前代と現時とを問はず、大家の作を尊敬し、これに接近するは、刺激を受け、或は敎化を受くる點に、利益多きは、有識者の決して疑はざる所なり。然れども只尊敬するのみにして、文學の目的を忘却するに至りては、有害なるもの有りと言ふべし。而して此の弊や、有識者より流れ出づること多きは遺憾なり。その誤弊とは他なし。古大家の流儀より、法則を打算することなり、儀型の觀念を作ることなり。そは創作ならで模倣を薦め、新作の代りに舊型に倣ふことなり。斯くの如きは、原型に忠實に服從して作りたる佳作よりも、更に劣等なりと謂ふべし。青年作家の

作を捕へて、その古文學に類似するは、如何なる點なりやと研究するよりも、古人の業より出發して、如何に遠く進みたるかを看るは、寛濶なる見識なりと雖も、斯くの如く批評する人は甚だ稀なり。怜悧にして雅致ある模倣よりも、粗雜にして寧ろ生硬なるは有望なり。何となれば彼れは自身の胸中を表現するに、古人の書物中に存する方法ならで、自己特有の方法に據らむとするが故なり。げに獨創の文學者の最初の作は、概して拙劣なり。次ては模倣時代あり。これ長からねども、其の中には或る古大家の影響は歴然として觀取せらるべし。かくて後、本來の獨立心再び奮起して、腐儒的批評に頓着する所なく、其の

所信を貫かむとす。獨創的文士の作は、獨創的なるが故に、儀型主義の徒輩は之れを顧ざるべしと雖も、其の呼び聲には眞實の勢力あるが故に、軈て世界を動すべし。余が青年文士に向つて忠告せむと欲ずるは次のごとし。自身の精神が認めたる眞理には、飽く迄も忠實ならざるべからず。然れども他人が表現したる眞理より發足するを善しとする批評家の指定には、傲然として屈服すると勿れ。斯く言へばとて、一新作は、前代に作られたる物とは、全く異りたるが故に、秀逸なり、賞讃すべしと論斷するにあらず。そは眞實なるも、或は誤謬なるも、兎に角に獨創的なり。而して次の事は確實に謂ひ得べし。如何なる作

と雖も、現存の作の內容外形に忠實なれば、內的價値、即ち本來の價値は全く無し。堅忍不拔の精神を有する作家にして、而も名を成さゞる者あり。彼れ等を苦むるは批評家たり。劣等の批評家は、彼れの作を見るや、之れと現在の儀型とを對照して判定を下し、毫も文學の目的及び人間性の法則を顧ざるなり。作家は知る、自身の作は、獨創的に作られたる物なれど、自身が似ざらむとを勉めたる古人と比較せらるゝとを。彼れは知るべし、批評家が缺點として揭出したる者は、實は獨創の點を賞したるに外ならざるを。彼れは眞理に信賴し、神聖なる事業を爲したりと思惟すれば、玆に慰籍を得べし。なほ評家が誤謬の

みにして何等の長所なしと排斥する作も漸次に社會又は子孫の是認する所となるべしと思念すれば慰藉あり。文學史には、批評家が全く謬妄の中に徘徊したる實例甚だ多し。彼れ等嚮導者は、自身にて横道に迷ひながら、大道を歩行する人を嘲ける愚物なり。

古典の研究、殊に美辭美文章などを主として研鑽すると多き人にして、研究の功績を誇りながら、而も文章を草するに當りて、巧妙ならず、復た精確ならざる人あるは、明瞭なる事實なり。斯くの如き結果の生ずるは何故ぞや。本來美術心なくして、辭句文章の妙を感ずると能はざるに出るべしと雖も、一には模

型を學ぶに當りて、誤謬の方法を用ふるが故なり。効果を起し得べき心理的狀態を明白にせず、また大作家は如何なる點に於いて力を有するか、如何なる點に於いて缺陷を有するかを辨別せざれば、有力なる作家と雖も、往々誤を生じ、また薄弱なる者は邪道に入る。同樣の誤謬より、數百人の文士は、同時代の大家の文章を模擬して自ら欺く。彼れ等は拉典語の慣用法、ジョンソンの筆法、マコーレーの短句法、ミルトンの壯重なる語法、さてはサッカレーの通俗的文章、デクエンシーの文章等を模すと雖も、何の効かあらむ。二三の批評家、愚昧なる鑑定者は、之れを絢爛の文と稱すべし。されど社會は動されず。これ

其の中に生命なきが故なり。模倣したるものに、生命なきは明瞭なり。

眞正なる文體とは、思想を宿して生命ある肉體なり。そは取り外しの出來得る衣裳にはあらず。此の點は吾人の最も注意すべき點なりとす。作者の心を表現したる物が文體なり。繪畫は、畫家の思想を形式又は色彩の標符によりて具體化したるもの、如く、言語上の標符に依りて、作者の思想を具體化したるものが純正の文體なりとす。即ち生命ある者なり、肉體なり。人は美麗なる假面を冠り得るが如く、自の思想に假面を冠らしむるを得べしと雖も、そは文學にあらざると、猶ほ假面行列が眞の

人間生活ならざる如し。

純正ならずんば文體は決して美ならず。文體は作者の心の表現ならざるべからず。元より作文の法は熟知せらるべからざるも、舞踏者が身振を學ぶが如くなるべしと雖も、舞踏の優美に於けると等しく、文體の美は、此れ等の方法を自由に使用し得たる後に生ず。即ち更に深遠なる源より流出するなり。作文上の規則を知れば、文章上に大誤謬を生ずるとなしと雖も、こは決して文體を成すに多大の功ある者に非ず。況や古人の模倣をや。今日マコーレーを模して、短句、復演、對偶等を用ふるのみならず、地理的、歴史的説明をなし、十八世紀流の句法

を爲すものありと雖も、誰れか之れをマコーレーの文致として見る者ぞ。斯くの如き人々は、マコーレーの文の妙所を觀ずると能はざるなり。彼れは才能秀でたるが故に妙文を草したるなり。文章の構造に妙あるにあらず。彼れの智は豐富なりしが故に、妙文あり、その引例に妙趣あるにあらず。豈獨りマコーレーを模する者のみならむや。或者は古文法を棄てゝ、俗語を用ひ、以つて平明且つ有力ならむと勉む。平明雄勁は處方書に據りて出來るものにあらず。模型を研究し、規則を知りたればとて、平明、優雅、簡素、熱烈、明徹の文章を草し得ざるなり。繪畫的才能にして始て具體的形像を造り得べく、眞正の性にして始て輕妙なる諷刺を物し得べく、直情徑行の人にして始て犀利なる文章を物し得べく、思索力强大なる人にして始て深遠壯重なる文章を物し得べし。心狀に伴へるもの即ち文體なり。自己の感想は主にして、その言語に表れたる物は文體なり。始より文體あるにあらざるなり。固より一の文體にして他の場合に適せざるものあり。律呂の破壞は却つて感興を大ならしむる場合あり。されば最も自然なる文體が、最も秀逸なりと稱すべし。例へば感極りたる場合には、言語の調はざる文章を以つて表せば、却つて効果多きが如し。之れに反して文法上誤謬なきものを以つてすれば、感興を鍛くと甚し。これ前には自然的、後に

は不自然なる文體を用ふるが故なり。

他人の流儀を模倣したるを見れば、恒に不愉快を感ず。これ第一には其の純正ならざるを感ずればなり、第二には其の表現の法にのみ注意して、著者の言はむと欲する所を顧ざるが故なり。茲に至つて文學者の記憶すべきものあり。作者は其の文章の直接の目的を恒に念頭に置くべし。即ち見得べき標符又は形像によりて思想感情を傳ふるが、直接の目的たるを忘るべからず。射術者は、的の外に何物をも見ざるなり。若しも明かに看取し、其の見たる物がまた如何に見るかを誠實に語るものあれば、假令技倆に於いては妙術なく、優雅の點なしとするも、自

然が附與したるだけの力を示すを得べし。此の以上は決して獲べからず。若しも他人の術を模せむとすれば、却つて失敗を招くべし。何人と雖も自己の弱點より免るゝを能はざるなり。如何に他人の流儀を以つて表現するも、決して自己の性質を掩ふを能はざるなり。バッフォン曰はく、文體は即ち作者自身也と。然れども之れを隱蔽せむとすれば、却つて勢力を失ふに至る。

佛國の批評家は、概して規則を尊崇し、古文學を崇拜すること恰も靈像に對するが如し。これ佛國の文學界が豐かならざる一因なり。彼れ等曰はく、善嗜好の規則、及び文體の原則は、十七世紀の大文豪によりて制定せられたりと。されば現代の人は

是れ等古典を精細に研究して、たとひ古人と同列に至らざるにもせよ、その流麗都雅に接近せむとを勉めざるべからずと。十九世紀に生れたる記者が、十七世紀に於いて賞讃せられたる文學者の流儀を學ばざるべからずとは、論駁するの價値も無き愚論なり。されど佛蘭西人は、今なほ斯くの如く感ず。こは古代を信ずる迷信の一として見るべし。先づ知識上に就きて見よ。古人は總ての眞理を發見せりと信じて、若しもアリストートルの深意、プラトーの奥義を究むれば、宇宙萬物の眞相を知り得べしとなせり。此の迷信は、今日尚ほ一部に存すべし。去れど吾人は知る、今日いかに忠實なる學生が、希臘の古書を究めたれば、宇宙の眞理を知りたると少し。之れに反して宇宙其の物を研究する者は、多く獲る所あるに非ずや。洵に科學の進歩は、漸次に迷信を破壞しつゝあるなり。然るに藝術批評の方面には、未だかゝる進歩あるを見ざるなり。知識の方面にては、既に古人を最も賢なりと信ずる者少きに、藝術上にては、依然古人を最も美なりと信ずる者多し。否、古人の作は決して優秀ならずと思ふ人も、傳說に束縛せられて、之れを發表せず、只胸中に秘す。加之、古人を研究すべき知識もなく、同情もなき淺薄輕佻の論者が、古文學を罵倒するが故に、古人に對する正當なる解釋の發表を却つて阻害すゝげに古語を知らずして、古

文學を非難する者あるが故に、古文學に對する迷信は、破壞せられざるなり。

古今の文學が、價値ある物とするも、これを模して古典的たると能はざるなり。純正の原理は、美の原理を支配して、模倣を禁じ、競爭を命令す。能ふ限りを勗めよ。若しも汝に巧妙なる表現の雅美、有力なる表現の力あらば、汝の文體は稱讃せらるべし。汝自身の見る所を出せ。他人の見を用ふると勿れ。他人の言語を使用すればとて、世人は傾聽せざるなり。他人の話法を借用すればとて、いかて克く雄辯たるを得むや。他人の滑稽を模したればとて世人を笑はしむると能はず。

予が斯くの如く論じ來ればとて、古文豪を排斥して、彼れ等を研究するも、何等の利益なしと論結すと假定すると勿れ。予の說は、古人の中に例證され、或は表現せられたる普遍的原則を見るが、正當なる古文學研究なりと言ふに在り。かく正式に古人を究むれば、自ら模型崇拜の誤謬たるを知るに至るべし。吾人が彼れ等より學ぶ所は、意味を明瞭に彰はし、又情緒を焰上せしむべき標符を選出する巧妙の辨別力なりとす。元來作者が其の思想を文字に現はすは、自身の爲にあらずして、他人の爲たるを思はざる可らず。されば何事を措きても、明瞭ならむことを勗むべきなり。他人の心に入り易き適當なる表現を成さゝ

るべからず。若しも彼れにして標符を濫用せば（例へば一語に新意義而も世人の知らざる義を含ましむるが如き）自身は明白に其の文章を眺め得べしと雖も、他人は霧中に彷徨するの感なくんばあらず。偖て茲に至つて、獨創的文學[illegible]難關あり。何ぞや。彼れは新奇にして獨立的なる物を、舊き標符を以つて表現せざるべからず。さはれ此の困難は、特殊の才能によりて除かるべく、熟錬によりて漸く感ぜざるに至るべく、獨創的心狀と接して益す輕減するを見るべし。若しも雄大に起草せむと欲せば、大文豪を吾れ等の友とすべし。されど彼れ等と親密なればとて、吾が天性の力は增大せざるなり。文士は詩人と均しく

天成なり。彼れ等は其の附與せられたる物を、有効となすに勉勵せざるべからず。習練は彼れ等の愼重なる感性を助けて、恐らくは無意識の間に、彼れ等を敎へて、或る言語の排列は他よりも有効なり、如何なる場合には通俗にして具象的たる表現適合し、如何なる場合には、高遠にして抽象的なる表現の適したるかを知るが如く、有効なる表現法を悟らしむ。古今の文豪は、自身の練習又は他人の練習を本として、幾多實用上の規則を作れるなり。而して眞の批評哲學は此れ等の實用的法則を科學的に歸納して、心理學の法則の下に置き、且つ之れを確證す。原則はシセロ、アヂソン、又はバルク、スミス等が用ひたるが故に

確實なるに非ず。そは人心の恒性に契合するものなれば也。

第三節　哲學又は科學書の文體

哲學者又は科學を專攻する人にして、文體は文學上最も必要なるを承認するに吝ならざる者あり。然れども其の人の面前に出でゝ、斬新にして意義深遠なる書の文章上の缺陷を非難すれば、彼れは內容を忘却して徒らに外形の裝飾に迷ひ、而して科學の神聖を汚す輕薄文士として吾れを非難すべし。然れども斯くの如く主張する科學者は、彼れ自身輕薄なり。深刻の觀察力ある人は、其の調子を變じて、缺點を補はむとす。げに科學書

の多數の缺點とする所は文體の不完全に在り。遺に佛國人は幼少より文章の完美を敎へられたるが故に此の弊少し。英獨人に至りては然らず。研究の爲には如何なる勞力を厭はざる者にして、文體の爲には勞する人甚だ稀なり。引用語を確證せむが爲に、午前の時間全部を費す人にして、惡文章の改造に十分間をすら費すを嫌ふ人あり。參照のために苦心する人多しと雖も、適當なる表現を成さむと勉むる者稀なり。假りに長日月間の收入を投げ出して、頸飾のピンを購入し、而して見苦しき衣服を着する者ありとせよ、世人は彼れに對して何とか謂はむ。吾れ等は他人の博識を賞すると共に、其の拙劣なる文章を等閑視し

て可なりや否や。文章の完からざる物を稱するの理なきなり。

文體なるものは、生命ある思想の肉體にして、裝飾たる衣服（多少を論ぜず）に非ざるを明白に會得すれば、余が說きたる誤謬は決して傳染せざりしならむ。文體の美は單に優美ならしむるに外ならず、裝飾に外ならず、裝飾を以つて讀者を眩惑せむとするに外ならず、決して有効なる表現をなすものに非ずと思考する人は、決して內容の完全を求むものにあらず。これ彼れ等は文體によりて內容を完全に傳達せむと欲せざればなり。明白なる概念を有する人は、斯る誤謬に陷らざるなり。思想は文體に依りてのみ、他人に傳へ得るものなり。若しも文體にして、

紛雜不明ならば、讀者は混亂せる材料內容を見るのみにして、何處に主旨の存するやを究め難し。かゝる場合には、之れを再建改造する藝術家こそ待たるゝなれ。彼れは之れに形を與へて、明白なる物として讀者に提供すべければなり。

文章と思想との關係を誤解する人多きこそ遺憾なれ。彼れ等は彫琢を施し、華美なる文章を草するが、記者の面目なりと信ず。思想と一致せざるもの、いかで文章の面目を備ふべき。純正の原理は嗜好の高雅と共に、文體の眞正を保つものなり。評論家、小說家等が、純正の表現をなさゞれば、効果を收め得ざるは明かなれど、哲學者、科學者、史家、さては倫理學者と雖

も、文體の美を保たざるべからず。パスカル、ビオー、バッフオン、又はラブレース等は優美平明の文體を作りたる好例なり。彼れ等は科學の尊嚴を、秋毫も失ふことなく、而も文學上の美を持つて、其の思想を傳へたり。ベーコンも亦活々たる知識と共に、幾多の長所ある文體を保有したる哲學者なり。カントに至りては、如何に憫むべき對比なるかよ。彼れの感性は非常に狹隘なりしが故に、豐富なる表現の材料を求め得ざりしなり。彼れがベーコンの作と、其の美を競はむとせざりしは賢なりと稱すべし。否、彼れは不賢ならざるのみならず、未熟の材料を呈出して、社會を惑はしめたるは有罪なりと稱すべし。彼れ若し

其の拙文は、思想不完全なるが故なりと悟らば、其の思想を鍛錬して、論理的また平明なる文章と現はすまで、筆を執らざりしならむ。かくの如くんば、彼れの作が讀者を敎ふると、今日人を苦ましむるが如く大なりしならむ。主題が復雜なるが故に、之れを明白に說明する能はずとの辯解は成立せざるなり。デカルト、スピノザ、ホッブス、又はヒユームの作を見よ。彼れ等の著書は、均しく復雜なる問題を論じたる物なれども明晰なり。材料を統一すれば、深遠なる問題も、善く難澁ならざるやうに論述し得べきは、是れ等先哲の實例を見て推知するを得べし。

主題に因りて文體に差別生ず。主題の範圍狹隘なるか、或は

純抽象なれば、其の文體は、莊重嚴肅ならざるべからず。若し之れに反して問題廣濶なるか、或は情熱の衝動を受けたるものとすれば、之れに相應したる文體を要す。數學書なるも、哲學書なるも、共に文體の雅致あるを必要とす。かく言へばとて、決して或る流儀に從つて作せよと主張するにあらず。文體は飽く迄も著者の心の表現ならざるべからず。一の問題たりとも、之れを觀察する心は種々なるが故に、之れを記述する文體も亦樣々なり。乃ち文體は人に因りて異なるなり。ベーコン、ホッブス、パスカル、ガリレオの如く、嚴肅なる思索心あると共に、滑稽の才ある人ならば、其の催笑的才能は、必ずや文字の間に

顯出すべし。されど元來此の才能なき者が愁に滑稽を混へて、文體の雅致を完からしめむとすれば、其の文章は決して眞正ならず。

第四節　處置と文體

從來使用し來りたる文體とは、『處置』と言ふ廣義よりも、狹義の表現の意に用ひたり。こは共に似通ひたるものなり。一の問題を處置すとは、作者の胸中に存する物を表現するとなれば、此の場合の文體とは、廣義にして、觀取及び純正の原理を離れたる特別の法則の下に置きて論ずべからざるものなり。理想的

なると、空想的なると、普通なると、異常なると、悲哀的なると、可笑的なるとを問はず、作者は其の問題を特有の眼識を以つて眺むるの必要あり。妖魔の世間に逍遙するも可なり、抽象の世界に遊ぶも可なり。空想的に其の想像を構成するも可なり、日常の事物を綜合するも可なり。さはれ一たび撰擇したるものには、全く忠實ならざるべからず。妖魔の世界を、現在の或る場所に似たるが如く表現するは不可なり。問題、主題、題目の處置は、堅實の眞理を守らざる可らず。眞理といふ、元より藝術の範圍内に限られたりと知るべし。されば畫家は、出來得る限り、陰影法によりて、自己の看たる所を描寫せざるべからず、

實物使用の如きは、斷々乎として排斥すべし。例へば黄金を現はすに、實の黄金を使用するが如きは、藝術の面目を傷くるものなり。吾れ等が、色彩に由りて表されたる黄金を見て感賞するは、克く其の幻像を起し得るまで、實物らしく作らむとの困難に堪え得たる點に在りとす。

表現の眞理には、言外の妙趣あり。その表現せられたる物は、如何に無味の物なりとも、之れに由りて其の四邊には虹彩現ず。町の一隅に悶然として立てる警官、又太陽の光線を受けて心地好げに眠れる豚などは、實際にては何等の趣も無けれども、一たび畫家が、妙技を揮つて之れを寫せば、觀者は此れ等にも、

無量の趣味あるを感ずべし。此の畫家よりも劣等なる畫家が之れを畫けば、繪畫は疲勞したる人を慰むるに止まるのみ。更に劣等なる畫家が製作すれば、藝術的教化を受けざる者の外は、一人として之れを悅ばざるべし。觀者が藝術品に對して趣味を感ずるは、困難に打ち勝ちたる點を承認するが故なり。而してこは眞に迫るといふ度に依りて示さる。其の度はさまゝなり。最下等に至りては、眞實を遠かると甚しく、吾れ等は只作者が何物を描寫せんと欲したるかを認むるのみ。之れと同じく小說又は戲曲にても、劣等なる作者の作には、彼れの表現せんと欲したる人物を認むるのみにて、決して人物其の人に接觸せざるなり。

酷似の度に對して吾れ等は稱讃の辭を放つのみならず、酷似せんとする場合の困難に對しても亦然り。換言すれば製作の難易によりて、吾れ等の稱讃に差別あり。外部の輪廓を捕へたる物よりも、人生感情の複雜なる變動を主題とするは、非常の難事にして、出來上りたるは高等なる藝術なり。先に例とせる警官に就きて言はむ。その空心者の如く、町の一隅に立てる姿、人體、衣服すべての點が、眞に迫るは中々に困難なり。若しも畫家にして、かゝる趣味なる對境をも、眞狀と均しく表現すれば、畫面には新趣味生じ、吾れ等は其の困難に打ち勝ちたるを

稱せずんばあらず。されど之れ決して高等藝術と稱すべきものにあらざるなり。高等の藝術を作らむには、更に深大なる困難を切り拔けざるべからず。人物は情の激動せるものとして表現せられざる可らず。吾れ等は心狀の動搖せる人物が、眞狀に迫りて表現せられむことを望む。心理の變化動搖する人物を描寫するは、一定の形式又は姿の人物、即ち靜的、お定り的の物よりも、非常に困難なり。戲曲家又は小說家にして、平凡なる人生、即ち心裡に動亂なき日常生活を寫す場合には、克く眞狀を表現し得る者多しと雖も、人物の一たび情熱の人となるや、多くは之れを殺す、乃ち眞の人物は現れず、其の言語動作等全く虛妄

となりて、作物は何等の趣旨をも保有せざるに訖る。これ處理の法宜しからざるが故なり。其の視力は薄弱にして、而も純正の原理を遵奉せざるが故に、文體は混亂す。文學の成功は、文體の誠實に基く。これを、離れては、決して成功すると能はざるなり。

余は處置の問題を長く論ずると能はず、文學上の作物は、必ず趣味を保有せざるべからず、然らずんば決して成功せざるべし、趣味また嬌態は、眞に複雜なる作家の心狀に本づくものなり。藝術上の處置は、哲學上の組織なり。自家の所見を概括し、諸部を適宜に排列し、用意、推進、論及を明確にして、毫も混

雜を生ぜしめざるが組織なり、議論の構造に關するものなり。而して文體(狹義に於ける)は文章の構造に關するものなり。さて然らば其の文體は、如何なる點まで法則に還歸せらるべきか。これ次章の主題なり。

今茲に眞の大人ありて能く自己の利害を知らば、有りの儘に心裏を描かれむことを望むなるべし。

マコーレー

第六章　文體の法則

第一節　研究の方法

前章に據りて、本章の目的は略ぼ了解せらるべし。予は文章の機械的方面を研究せんと欲するのみ。詳言すれば、名文なるものは、如何なる組織より成るかを、研究せむと欲するなり。古今の名文を分解すれば、其の妙味は失はるべしと雖も、而も名文の本質を窺ひ、且つ如何にせば妙文を草し得るかを推知し得るなり。これ猶ほ解剖學の如し。予は此の章に於いて、文學

の大家を教訓せむと欲するものに非ず。讀者も亦之れに依りて、大文章家たり得べしとも信ずること勿れ。さはれ如何なる人と雖も、或る誘惑のために、正道を離るゝことあり。而して余の研究は、かゝる場合に、誤謬を避けしむるの効力あるべしと信ず。元來文章組織の研究は、ヘルバルト、スペンサー氏を除きては、稀に見る所なり。また予の研究は、決して完全なりと稱すべからず。されど文體の法則を組織的に記述し、以つて文學に志す人を、邪道に迷はしめざる効力あるは、予の自信する所なり。

文學の目的は、教訓と娯樂となり。從つて文體は智に訴ふる

場合と、情に訴ふる場合との別なからざるべからず。同じ事柄にても、智に訴ふる場合と、情に訴ふる場合とにては、文體の組織に差別あるは贅辯を要せず。此れ等の場合を綜合して、如何にせば、文章を作り得べきかを攻究するに、五條件を掲げ得べし。固より甲の條件、乙の條件と別つて、其の孰れか、尤も有効なるやを判定し難しと雖も、此れ等條件が互に補佐して、茲に初めて名文と稱すべき文章の生ずるは疑を容れず。余の掲げたる五箇の條件、即ち法則は、余自身の規定したるものにあらで、大文學と稱せらるゝものを分解歸納して獲たるものなり。

所謂五箇の法則とは左の如し。

（一）經濟の法則
（二）簡潔の法則
（三）連續の法則
（四）漸層の法則
（五）變化の法則

此の五法則を、經濟、漸層、及び變化の三法則に歸納するを得べく、或は更に細分するを得べしと雖も、茲には斯くの如く區分す。こは便宜なるのみならず、文體の二大元素、即ち智及び感性と相應ずるが故なり。經濟と簡潔とは、智上の要求より生じ、漸層と變化とは感性上の要求より生じ、而して連續の法則は其の中間に位す。以下簡單に此れ等の法則を說明すべし。

第二節　經濟の法則

吾人の研究は試驗的にあらずして科學的なり。こは心理學的基礎を有す。文章とは畢竟他人の讀むべきものなれば、讀者の心狀態其の物が、法則を定むること、多言を用ひずして明白ならむ。

茲に經濟の原則といふ、そは非常に簡單にして、解釋に難からず。何となれば是れ機械の製造組織と比較し得べく、復金錢の使用とも比較し得べければなり。金錢の使用を考へよ。經濟上

にては、冗費を除くを第一の原則とす、これを裏面より言へば、金錢を最も有効に使用すること是れなり。更に機械の組立を見よ。勢力の消費を可及的小量ならしむるは、其の大目的なり。無用の部分を設けて、之れが爲に、エネルヂーを浪費するは、機械學の最も厭忌する所なり。必要の部分だけを保存して他の不必要なる部分を取り除くは、熟錬せる機械師の必ず行ふ所なり。

文章組立に於けるも亦斯くの如し。文章とは自己の意見を、明瞭に傳達するを目的とするが故に、其の目的に愜ひたる組織ならざるべからず。即ち讀者の勢力が、徒費せられず、克く作

者の意義する所を會得し得べきものならざるべからず。機械に與へられたる力は、文章に在りては、讀者の勢力（讀書力）なり。勢力の浪費は兩場合に於いて均しく禁ずる所なり。著者としては、言辭を有効に排列せざるべからず。裏面より言はゞ、讀者が容易に作者の全意を了解し得べき文章を草せざるべからず。これが爲には言辭の節減を行はざるべからざること、猶ほ機械の無用部分を除去するが如し。

經濟の法則とは、無用の文字を除去することなり。讀者をして文體の形式に、多くの勢力を費さしめざること是れなり。元來無用の文字あれば、讀者は之れが爲に、徒らに勢力を費す。

必要もなき言辭を挿入すれば、讀者は之れを解釋するために、勞力を費すが故に、著者の本旨を解釋せんとする場合に至りて、往々爲し能はざることあり。文字の經濟といふ、決して貧しかれと言ふにあらず。たゞ不必要の文字を挿入すること勿れ。我が表現せむとする思想感情を、簡明なる形式に表はして、讀者の勢力を減ずるが、此の法則の命ずる所なり。殊に議論文などに至りては、此の法則を嚴守せざるべからず。青年文學者の通弊は、古文學中より自己の識れる限りの文字を撰び出して、使用せむとするにあり。これ大なる迷妄なり。斯かる場合には、再三其の文を削除して、簡明となるを俟ちて後に發表すべし。

無用の文字を省略すべし。贅言は文章を傷くるものなり。文字多ければ、讀者の心力の活動を遲緩ならしむ。言辭少ければ、讀者は容易に著者の本旨を捕へ得べし。されど茲に注意すべき要件あり。餘りに心力を勞することなければ、却つて要旨を觀過することあるが故に、讀者の注意を引き留むるやう、文章を物せざるべからず。餘りに簡單なれば、却つて本旨を傳へ難きが故に、讀者が吾が文章に留意する程に作るべし。即ち文字を過度に節減すべからず。これ効力を失ふものなり。依つて吾人の注意すべきは、注意を引くか、或は之れを攪亂するか否かの點に在りとす。他人の心を紛亂せしむるが如きは非なり。さり

とて注意を起さしめざるも亦非なり。其の中間を取りて文字を利用するこそ要なれ。かゝる場合には直接の必要もなき文字の用ひらるゝことありと雖も、そは予が言ひし無用の文字にてはあらざるなり。讀者の注意を引き留むる點に於いて最も必要なるものなり。直接に必要もなき文字を使用せむとする場合に當りて、此の範圍外に出づれば必ず失敗す。

簡單少數の文字が、非常に有効なる場合あり。例へば『創世紀』に「神光あれと言ひたまひければ光ありき」とあり。これ最も有力なる文章にして、若しも加ふるに形容の文字を以つてすれば其の美は消滅せむ。されど此の例を見て、簡單少數なる

は、必ず有力なりと思惟すること勿れ。場合によりて多數の言語を用ひざるべからず。著者は常に讀者の快樂を眼中に置かざるべからず。流暢なる文章は、讀者の胸中に入り易く、彼れは心地好く其の本旨を知り得べし。啻に文章のみならんや、談話にも亦此の經濟の法則の必要なること、機械製造に於けるが如し。實に言辭の有効なる使用は根本の原則なり。

第三節　簡潔の法則

經濟の法則は、少數の文字にて、十分の意義を發揮せよと命ず。贅言は省略すべし。簡潔の法則に於けるも亦斯くの如し。

こは經濟の法則と、同一の心理的基礎に立つ者にして、相接近せり。されば予の斯くの如く區別したるは、便宜上にして、其の別を言へば、經濟の法則は主として文字の方面より立てられたるもの、簡潔の法則は文章の全體を見て制定せられたるものと思はゞ可ならむ。而して此の法則も亦無用の長物を以て讀者を苦ましむる勿れと敎ふ。

最も簡單なる方法を以つて、最も有力に思想感情を表現するが、簡潔の法則の命令する所なり。茲に注意すべきことあり。何ぞや、複雜と無用とを混同すること勿れ。簡潔といふ文字を、複雜ならぬことゝ同一視すること勿れ。複雜と簡潔とは決して

衝突するものにあらず。無用の文字を羅列すれば、文章は錯雜紛亂すべし。此の錯雜を見て、複雜と思ひ、而して簡潔の法則は複雜を禁ずと早斷すること勿れ。複雜ながらに、簡潔なるべしと敎ふるが、此の法則なり。一人にして爲し得る業を、二人にてなせば、これ無用の力を用ひて、業を錯雜ならしめたるものなり。これと同じく一語にて表現し得べき所を、二語にて現はすが紛雜なり。若しも二語を要する場合には、二語を用ひざるべからず。されど第三の語を挿入すること勿れ。元より簡潔とは比較上の辭なり。今人の顏面を描寫するとせんに、素描の場合ならば、その特色のみを寫せば、克く之れを彷彿たらしむ

るを得む。これ此の場合に於ける簡潔なる描寫法なり。若しも進んで更に寫實的ならしめむとする場合には、更に複雜なる方法を用ひざるべからず。されど如何に綿密なればとて、無用の描寫を爲せば、表現せむとする顏面は決して顯れざるべし。即ち單純なるべき場合にも、複雜なるべき場合にも、決して無用の物を挿入せざるが、簡潔の法則の原意なり。文豪は善く此の區別を知る。彼れは無知なるが故に平凡の方法を用ひたるに非ず、また衒はむと欲して雄大の言辭を使用するに非ず。これよく場合を觀じたるが故なり。

贅物を遺棄すべし。さらば平明なるべし。これ窮乏貧困の意

にあらずして、一致の義なり。適當なる表現といふが大原則なれば場合によりて表現の方法異る。複雜には複雜、通俗のものには通俗、抽象的には抽象的方法を撰ばざるべからず。アンチゴーネなる女性も、オセロも、其の性格の單複に差別こそあれ、簡純といふ點にては同一なり。共にこれ贅疣もなく、不足もなき人物なり。足は駢拇にても不可なり、枝指にても不可なり。

無關係の事物を使用するは不可なり。これを省略するも、全部に何等の影響をも與へざるが如きものは、除去して可なり。然るに淺薄なる讀者批評家等は、全部を觀察すること能はずして、唯小部分を眺むるが故に、無用の長物をすら稱揚して止ま

ざるなり。彼れ等いかに詭辯を弄するとも、簡潔の法則は決して傷損せられざるなり。

此の法則を說明せんには、戲曲ほど適當なるは無かるべし、戲曲とは一定の時間內に一の物語を表現するものなれば成るへく無用の事件、又は文字等を省略せざるべからず。節略するも決して物語の本筋即ち生命を傷けざる程の出來事、對話等は、之れを省略せざるを得ず。例へば赤穗の仇討を十二段に縮小したるが如し。山良之助の上京とか、判官のお預けになる模樣とかを、一々列擧したらむには、物語は全く紛雜混亂して、何等の美觀をも呈せざるべし。之れに反して小說は、時間の制限なき

が故に、動もすれば冗漫に流る。前節にも述べたるが如く、文學は快樂をも目的とするが故に、餘りに縮小しては、香味を失ふの懼あり。されば之れを補はむがため、本筋とは直接の關係なき人物、事柄等を加ふるは可なり。否、之れを爲さゞるべからず。然れども全く無關係なる章節を設くるが如きは非なり。

文體の簡潔とは、生理的に一致あるとを意味するものなり。構造の簡單なると、複雜なるとを問はず、生理的機關は必ず一致あると、人體又は生物を見て知り得べし。文章に於けるも亦斯くの如し。全部が一の贅疣なく、また不足なく、克く一致を保ちたるを稱して、簡潔の文體とは稱するなり。一字一句動か

すべからざる名文とは、吾人の恒に聞く所なるが、これ即ち一致ある文章の義なり。單純なるものは、單純ながらに一致を保ち、複雜なるものは複雜ながらに一致を保つべきと、猶ほ蛙の機關も、高等動物の機關も、克く一致を保つが如くならざるべからず。これをこそ生命ある文章とは言ふべけれ。

生命あり、一致ある文章を作らむには、必ず適當なる表現法を用ひざるべからず。己が語らむと欲する目的に適應したる文體を用ひざるべからず。茲に二樣の別あり。一は大略(概觀)を讀者に與へむとする場合なり。他は精細に事柄を與へむとする場合なり。吾が目的は、兩者の中、孰れに存するかは、著者の

先づ決すべき問題なり。概略を記して後に結尾に達せむとする場合に、個々物を綿密に描寫せば、決して其の目的を達し難し。繪畫に就きて見よ。一の山水全景を表現せむとする場合に、一木一石に重を置かば、觀者の眼は其の石、其の木に留まりて、終に全景を見ざるべし。これ畫面に一致なきが故なり。更に議論文を草する場合を思考せよ。餘りに材料を詳述すれば、眞の目的たる結論を、明白に示すと能はざるなり。第二に明細詳密なる記述を要する場合を考へよ。飽く迄も詳細なる表現を爲さるべからず。科學上の論文は、事實を最も明細に說明せざれば、決して明瞭なる結論に達すると能はざるべし。小說にても

概略のみを記して、而も明瞭に事件の變化を表現し得る場合には、單純なる文體を採用すべし。然れども複雜なる變化、例へば殺人犯を描寫する場合の如きは、綿密なる記載を必要とす。一人が他人を殺すといふは、單純なる心理的原因より來るものに非ず。故に深刻なる心理的描寫を必要とす。

前記せるが如く、偉大ならむと欲して、偉大なると能はず。若しそれ斯くの如くんば、これ虛僞の雄大なり。之れを救ふは此の簡潔の原則なりとす。更に此の法則は、誇張の反對たる無氣力柔弱をも救ふに効あり。己れの思想感情に忠實なるところそ基本なれ。

簡潔なれとの法則は、動もすれば小心翼々たる習慣を生ずるとあり。作文に當りて怯弱なると勿れ。或る人は其の說又は所見の偏狹ならむとを恐れ、或る人は其の說の平板ならむとを怕れて、折角の天才の活動を拘束せむとす。斯くの如きは、自己に忠實ならざるものなり。而して簡潔の法則は此の怯弱を救治するに最も有効なり。

第四節　連續の法則

此の法則は經濟及び漸層の兩法則中に配合するを得べし。何となれば經濟を完全ならしめむと欲するも、漸層を完全ならし

めむとするも、共に言辭文章の適當なる連續を必要とするが故なり。而も予が玆に特別に一節を設けて、連續の法則を掲ぐるは、文體にも韻律的連續あるが故なり。單に適當なる連續といふ以外に、韻律上適當なる接續あり。抑揚が文章に必要なりといふを見ても、此の點を推知し得べし。ヘルバルト、スペンサーは連續の法則を論じたりと雖も、氏は主として智的方面に關してのみ說明せり。スペンサーの說は如何。曰はく、言語の排置には唯一の適當なる方法即ち連續あるものなり。一の思想を傳へむとする場合には、これに相應したる言語文字の連續は唯一あるのみ。此の連續を用ふれば、讀者は容易に著者の思想を

自己の胸中に受領し得べしと。

されど此の說は、智に訴ふるものとして文體を看たるものなり。文體は智にのみ訴ふるものにあらずして、亦情緒にも訴へむとす。即ち一面は音樂的ならざるべからず。經濟の法則を守りたればとて、必ずしも音樂的なる能はず、復音樂的文章と雖も、必ずしも有効なりと稱すべからず。是こに於いてか連續の法則の研究必要なり。連續の法則は智的と情的との混合なり。されど之れを說明せむには智に關する方面よりするを以つて便とす。何となれば智的方面より觀察するは簡單なるが故なり。然らば其の原則とは如何。材料(即ち思想の各元素)の排列は、

歸納的なるか、又は演繹的ならざるべからず。若しも歸納的を擇はゞ、終局に至るまで、其の方法を變更するは非なり。

研究の方法に歸納的及び演繹的の二あるが如く、表現にも亦此の兩樣ありと謂ふべし。即ち個々の材料より漸次に推理して、目標に達する方法と、一の原則、即ち一般に眞理として信ぜられたる思想より、漸次に下降して個々物に及ぶ方法とあり。斯くの如き二方法は孰れか便なるやと言はゞ、一概に論斷するを能はず。そは場合に由りて、連續の方法異ればなり。個々物より推して一目標に達する場合に、演繹的方法を用ふれば、文章錯雜混亂して、遂に要領を得ざるべし。支離滅裂とは斯くの如

き文章を指したる語なり。さて此の原則は。漸層及び變化の二法則に依りて補助せらるゝは、多言せずして明かなり。

文體も美術なり。繪畫、彫刻に從事する人は、常に全體に就きて効果の如何を看取せんとす。然るに辭句の彫琢に苦心する作者にして、全部を顧慮せざる人多きは遺憾なり。全體の美觀こそ吾れ等の最も苦心すべき點なれ。大文豪は不知不識の間に、全部の調和を保ちて、克く連續の法則を守ると雖も、小文學者に至りては、此の點に達するあたはず。さらば規則に依りて之れを敎へ得べきか。これ不可能なり。連續法則は餘りに巧緻にして、規則などの能く說明し得る所にあらず。然れども尙ほ大

體の說明は、總ての人に取りて必要なり。何となれば大家と雖も、往々其の軌道を離れて、混亂の文を草すればなり。若し此の說明を知れば、盲目的に動く思想感情を統一するを得べければなり。又たとひ能力なき人と雖も、之れに依りて進步の境を示し得べし。

連續法則の據つて立つ所は、明晰と調和との二に分ち得べし。言語文字の排列は、他物を混じて、錯雜を生ずるが如くなるべからず。議論にても詩歌にても、枝葉の點に亘りて記述を綿密にすれば、全部は混雜せる物となり畢らむ。されば前後の關係は最も明白なるべし。Aなる筋を論述しつゝある場合に、XYZ等の他の筋を持ち來れば、Aの本筋は全く不明となるべし。

例へば引用の場合を見よ。餘りに多くの例を揭げ來れば、讀者は其の例にのみ心を奪はれて、本旨を窺ふと能はざるなり。自己の思想感情の明晰に傳達せむには、適當の連續なからざるべからず。不明曖昧なる思想の連續は、必ず混亂紛雜を生ず。若しも之れを文字に表せば、その文章は必ず錯雜す。自身すら明晰に觀ぜざる思想が、他人に明白に看ぜらるゝの理あらむや。文章の連續は、一、二、三、四と言ふが如く、平明の順序を踏みて進まざれば、讀者は容易に著者の思想感情を會得する能はざるなり。二より始りて、四、一と言ふが如き連續にては、讀

者は徒に前後左右に徘徊するのみにて、決して著者の本旨を了解せざるべし。吾人の心理の活動には順序あり。其の順序を破りて、明白の連續ある文體を草し得るの理あらむや。

明晰のみを以つて滿足すべきにあらず。更に音樂的ならざるべからず。即ち調和を保たざるべからず。詩歌、又は美文にて、調和を保つべきは、誰人も疑はざる所なれど、議論文に至りても亦其の必要あるは、世人の多く注意せざる所なり。連續に調和あるは、其の文體に力を與ふる所以なり。吾人の聽覺の快感を覺ゆるは、思想又は感情を受くる上に於いて、最も必要なりとす。言語の連續には必ず調和あるものなり。其の調和を捕へ

て、これを表現すれば、玆に音樂的文章生ず。斯くの如くなれば、讀者は最も容易に、著者の本旨を受納すべし。如何に明晰の文章なればとて、言語文字の調和を保たざれば、傳達上の効力多からず。音樂的なれば、讀者の思想は、なだらかに活動するが故に、著者の意は容易に傳へらるべし。然るに雜然として調和なく、突如として調子高く、或は低下すれば、其の毎度に、思想の進行は阻害せらるべし。散文にても大文豪の物せしものは、殆ど詩的なり。今日散文詩なる語の用ひらるゝは、此の音樂的連續の、如何に効力多きかを證するものなり。

明白なると、音樂的なるとは、孰れか主とすべきは、場合に

由りて異るが故に、茲に斷定すると能はざり。表現せむとする思想感情の種類に依りて、明白なる連續を主とすべきあり、又音樂的を本位とすべきあり。茲には餘白少きが故に、文例を擧ぐると能はざれば、たゞ二三の作家及び作物の名を擧げむ。『源平盛衰記』『平家物語』などは、音樂的連續に富みたり。『源氏物語』なども調和ありと雖も、そは國語を主としたるが故に單調の嫌あり。『源平盛衰記』に至りては、佛教語、漢文學の辭句等を、巧に邦語と融合したるが故に、音樂的調子の高きと前者の比に非ず。更に明白を主としたる物を求むれば、故福澤翁の文章は其の好例なり。又議論文にして而も音樂的調子を失はざるは鳩

巣の『駿臺雜話』なるべし。

第五節　漸層の法則

漸層の法則は多言の說明をなすまでも無く明白なり。漸層とは其の文字の示すが如く、漸次に力あるものを、重ね用ふるとこれなり。例へば音階の如く、最低音より漸次に最高音に到るが如し。元來吾人の感性は、馴れ易きものなり。或る刺激に馴るれば、遂に其の刺激を、刺激として感ぜざるに至る。熱帶地に旅行するとせむに、最初は熱氣を感ずると甚だしと雖も、十日二十日と滯在するに至つて、遂に最初の如く感ぜざるに至る。

皮膚に於ける感情すら斯くの如し。況や高等の情緒に於いてをや。いかに樂しく亦珍らしき事物なりと雖も、馴るゝに隨つて、之れを樂しく復珍らしと感ぜざる也。去れば斯かる場合に効果を興さむと欲すれば、强力なる刺激を與へざるべからず。即ち刺激の漸層を要す。これ豈生理上のみならむや、また長時間内の事のみならむや。

文體が十分に効力を有せむには、漸層の法を用ひざるべからず。或る言辭を用ひて、更に讀者の感情を上進せしめむとする場合には、前と同一の文字を用ふるの効力なきは言はずもあれ、同樣同種の文字も亦無効なり。乃ち其れよりも更に强力なる文

字を撰ばざるべからず。然らずんば讀者の感情は決して昂進せざるなり。之れ啻に一語一字のみに關する法則にあらず。一句一文章の上にても、全文章の上にても、此の法則を嚴守せざるべからず。

此の必要は、戲曲に於いて最も明白に看取せらるべし。一言一句、一場、一幕は、必ず漸進せざるべからず。出來事の連續に就きて言ふも、漸次に昂進するを必要とす。悲劇とせむか。一幕毎に悲劇的段末に接近する場合には、必ず層を積まざるべからず。然らずんば觀者は決して感興を覺へざるなり。更に情緒の熱したる場合を表現するとせよ。激烈なる言語に次ぎて、

靜雅なる語來らば、讀者の感美的精神は、甚だしく害せらるべし。層一層と强力なる言語を重用すれば、文體は有力なる効果を示すべし。

啻に戲曲のみにあらず。如何なる文章を起草する場合にても、漸層の法は必要なり。議論文にて疊むと言ふは、要するに漸層の法を意味したるものなり。英國に於いては、マコーレーは此の方法に最も長じたり。孟子の文章も亦此の例に富む。

第六節　變化の法則

變化の法則も亦漸層の法と同一の心理的基礎を有す。人心ほど變化を好むはなし。變化なければ人心は睡眠す。經濟、簡潔、連續、漸層の四法則を嚴守したればとて、變化なくんば、そは只嵌細工たらむのみ。單調は人心を倦ましむ。如何に七五調は美なりと雖も、これのみを重ぬれば、讀者は遂に倦厭の念を生ずべし。

ラスキン曰はく、正當なる劣等附屬物を除かれたる美は、美として成立せざること猶ほ蔭を除かれたる光線は、光線として成立せざるが如し。白きカンバスの上に光線を受けたればと、何等の効果なし。畫家は其のカンバスを種々に塗り、之れに光線を受けて始て美妙の光線あり。美なるものなればとて、之れ

のみを陳列すれば、其の美の本質を發揮すること能はざるべし。即ち劣等なる物が其の間に存在してこそ眞の美は現はるれ。自然界を見よ。美醜相混じて初て美あり。光線には明暗ありて、初で光線の美生ず。藝術家たるものは、此の點に注意せざるべからず。例へば勇剛なる武士の傍に侏儒を置き、美人の傍に黑奴を置くが如し。美しき物のみを現して、眞の美質を發揮せむとするは困難なりと。

ラスキンは明暗、美醜の點に關して此くの如く說明したり。これやがて變化の法則を說明するものならずや。山海の珍味も、朝夕之れを喰へば美ならざるが如く、如何に美なる物にても、

變化なくんば美にあらずや。然らば其の變化は如何にして生ぜしむるを得べきか。是こに於いてか吾人は再び純正の原理を持ち來らむと欲す。自身の信ずる所に依つて之れを發揮せよ。決して他人の用ひたる變化の方法手段を借用すること勿れ。如何なる人と雖も、單調なる思想感情を有するものにあらず。若しも單調なる心裡ならば、彼れは愚物なり。既に我れに變化あり。然らば則ち其の變化ある思想感情を、最も忠實に表現するが吾れ等の義務なり。げに根本に横はるものは、純正の原理なるかな。

* * * * * *

以上にて文體法則の大要を説明し然りぬ。去れば茲には此れ等を概括して附言せむ。

先づ第一に讀者の注意すべきは、此れ等の法則が、單に文章上の法規ならざること是れなり。本書に用ふる文體なる語は、最も廣義に見て可なり。即ち文學上の作物全體を指したりと見て可なり。單に文學の文字の方面のみならず、其の內容、其の材料等をも含むと看て可なり。依つて其の法則は、有ゆる方面にも應用し得るなり。

劇を一例とせむ。五箇の法則は。その形式的方面、即ち文章上に應用すべきは言はずもあれ、其の事件、內容に用ひても誤

なし。例へば人物に就きて謂はむに、無用の人物を登場せしめず、其の登場、退場を適宜ならしめ、其の行動に連續あり、變化あり、漸層あらしむるは最も必要なり。また物語の筋にても、五法則に從はずんば、決して觀者を感動せしむること能はざるなり。

第二に注意すべきは、五法則が、單獨にて有効なりと思ふべからず。五箇は互に相補佐制肘して始めて効力あるものなり。如何に變化を示すは必要なりと雖も、之れが爲に無用の長物を引用するは非なり。此の場合には經濟、簡潔の二法則ありて、之れを束縛す。また變化あるべしとて、無法の變化法を用ひな

ば、讀者觀者の感興を鍛ぐこと甚だし。例へば前幕にては非常の惡人なりし者が、次の幕にては善人となるが如く、或は微細の恨怨より人を殺すといふが如き極端なる變化これなり。此の場合に之れを制限する者は、連續の法則なり。又變化を主としたるが爲に、種々雜多の事情生じ、爲に讀者又は觀者の思想感情は、昂進することなく、却つて混亂を生じ、遂に之れと相離るゝに至ることあり。かゝる場合には、漸層の法則ありて其の危きを救ふ。此の他四法則に就きても亦同じ。一法則のみを守れば、必ず單調に流るゝの嫌あり、美を傷くるの弊生ず。これを救ふは即ち其の他の法則なりとす。

修辭學なるものは、畢竟此の五法則を本として構成せられたるものなり。本書の論じたる所は、甚だ簡單なれど、こは只原理を示さむが爲なれば、其の應用、實例は言はずもあれ、修辭學上の細論は、讀者自身にて之れを研究せよ。そは決して難事にあらざる也。

* * * * * *

本書の原著者ジョーヂ、ヘンリー、リユーキス氏は、千八百十七年四月十八日、英京倫敦に生れたり。倫敦小學校にて學び、次いてゼルシー、ブリタニー等に轉學し、後またグリーキッチにてバルネー博士の下に修業したり。此の校は古典崇

拜を以つて名ありき。

卒業後の著者は、先づ公證人に傭はれしが滿足を得ず、轉じて露西亞商人の店員となりしが、これ復た趣味なかりければ、斷然辭して、醫學の研究を試みたり。これ當時の科學的風潮に浴したるが故ならむ。然るに此の醫學も亦彼れに滿足を與へざりしかば、幾許もなく之れを中止せり。時しも文豪カーライルは、盛に獨逸文學を紹介したれば彼れ何時しか之れに感染し、獨逸研究の念禁じ難く、遂に意を決して、千八百三十八年該國に渡りて、文學哲學を修め、千八百四十年歸國したり。

歸國後の彼れは、雜誌記者として名を揚げき。後二たび獨逸に行きて、ゲーテを研究したり。著述の外に、彼れの事業として擧ぐべきは『隔週評論』の創刊なりとす。千八百六十五年、此の雜誌の第一號發刊せられ、爾來今日に至りぬ。本書は其の初號以下に毎號掲載せられたる論文也。千八百七十八年、著者は閨秀小說家ジョーヂ、エリオットの家にて永眠せり。

リエーキス氏ほど多藝なるはなし。繪畫を除くの外は何事をも試みたる人なり。或人曰はく、彼れにして一週間繪畫を研究せば之れを物し得たるならむと。彼れはゲーテを評して、

『大に受納し、大に製産する心』の人なりと。此の語は、やがて彼れ自身に用ひて誤なきものなり。又或る批評家言へり『彼れの生涯は、新聞記者、批評家、小説家、戯曲家、傳記家及び論文家として始まり、數學家、理學者、化學者、生物學者、心理學者、而して哲學組織の著者として終りぬ』と。彼れの一生を約言して當を得たりと謂ふべし。

彼れの著書甚だ多し。戯曲、小説、評論、哲學書、史傳等各方面に亘りて數種あり。今重なる著を掲れば左の如し。

列傳躰哲學史。ロベスピヤ傳。ゲーテ傳及び著作。コント氏哲學。海岸研究(論文集)動物生活研究。人生及び心理問題。アリストートル。普通生活の生理學。此他小説戯曲等數篇。

文學訓 畢

一段にても一字一句にてもいかにもどうしても入れ置きたしと思へども能く〳〵嚼み味て見ればつまり贅疣なる字面にて格別に用をなさぬ字句あるものなり其時一字一句或は一段の愛に溺れてそれをどこ迄も殘し置かんとするときは却て一篇の大害をなすに至る早く斷然として割愛してこれを刪り去るべきなり

海保漁村

附錄 詩とは何ぞや

文學美術に對する評論は、西洋諸國にては甚だ盛なるが、科學的に藝術を說けるは、獨逸を第一とし、審美學も亦この國に於て最も發達せりとす。審美學(aesthetics)といふ語の意義は漠然として、十分の說明を要することなるが、始めてこの語を用ひしは十八世紀の獨逸人バウンガルテンにて、以て感情の條理といふ意を現はさんとせしなり。蓋し藝術は智力よりも情緒に訴ふべき者ゆゑ、かく名けしならん。(審美學の獨逸原名は、感覺の學問といふ意なり)。

かくて審美學とは藝術の哲理と言ふなり。批評にもあらず、考證にもあらずして、藝術の生命其の精髄の原理を說かんとする者也。批評は諸藝術を觀察して、さま〳〵の事實を知り、それ〳〵特有の法則の存ずるを、歸納的に叙するに過ぎざれど、審美學は千種万樣の事實、現象、法則に於て、動かすべからざる根本的原理を看破し、他の批評の法則をして、この原理より分れ出でたる結果となさしむ。即ち藝術に必要の條件、手段、目的を絶對的、根本的に說明するなり。勿論批評は審美學を根據として發生し、其の哲理を實際に應用したる者なれば、この兩者は常に混同せらるれど、自から其の本領は異なりて、さな

がら生理學と醫術の施行との如き差あり。既に審美學は藝術の生理學なりとし、又凡ての藝術は哲理的根據を含むとすれば、審美學の哲理的說明を要するや明かなり。人生の思想行動の底には、一脈の哲理の潛むは疑ひもなければ、人生を寫つせる藝術、自から一貫の哲理を有するは當然にて、從つて其の藝術の哲理を研究する審美學の輕視すべからざるも明かなり。

そも〳〵今日の文藝批評の動搖して、絶えず惑ひつゝあるは、凡ての根元たる藝術第一の問題、即ち「詩歌(ポエトリー)とは何ぞや」の解せられざるに由るなり。玆にいふ詩歌とは、脚本新體詩等凡ての文學的製作を指す。この詩歌の何たるかを明解せざれば、他の

さま〳〵の問題に手を下すに由なし。この第一問題に關しては、古來無數の定義、說明、論評出でたれど、未だ諸學者の同意し得る程の者なく、何れも茫漠として一般に適應せられず。シユレーゲルは「詩歌とは永久に眞理とすべき思想を寫つすの鏡なり」といひしが、この定義は非常に漠然として、これを文藝品に應用すべくもあらず。シルレルは「强度の感情の發現なり」といひたれど、これも前者よりも、進步せりとも思はれず。アリストートルが「詩歌は模倣美術なり」といひしは、有名なる定義なれど、これも當を失せり。詩歌は模倣ならで、或實體を造り出し、讀者をして、さま〳〵の連想を惹起せしむる原素を、

其の中に含ませざる可からず。少くも詩歌は繪畫とは異なり、言語を用ひて或物の類似を其處に描き出すにもあらず。若し又詩歌を以て模倣美術とせんか、何の模倣なるか、目に映ずる者の模倣か、心に感ぜらるゝ者の模倣か、かの最も模倣的たりと思はるゝ敘事文にても、作者は事物其物を寫すにあらで、其の變化して現はるゝ樣を敘するなり。しかも裸體的に自然の狀態を描くにあらずして、これに想像の色彩を施すなり。例へば詩人が獅子を寫さんとするや、彼れは動物學者がこれに對する如き態度を取らずして、獅子の最も人を動かすべき點を暗示し、讀者をしてこの猛獸を目睹して起るべき感想を、この詩句を讀

みても起さしめんとすべし。然るにこの模倣説は甚しく廣く且つ深く跋扈し、諸家の評論にも屢ば出現し、ダーキンの如きは、常にこの説に本づいて詩を作るといへる程にて、嘗てポープの「キンドソルの森」の一句を評し、景色が實物的に讀者の眼前にあらはれずと難したり。思ふに彼れの説の如く、實際的事物を一々明晰に現はすを、最大の詩となさんには、詩は只事物の目錄の行列となるべし。元より彼れの説も一分の眞理を含み、始めより讀者の目に訴へて、或印象を起さしめんとする詩歌藝術は、明晰にして種々の解釋を許さざる程あり〳〵と寫つすべきならん。されど詩歌は凡て眼に訴ふる者のみなりと信ずるは、

甚しき誤謬にて、音調によりて耳に訴へ、或は文字外の餘韻を傳へんとする等、眼以外の諸感覺にも訴へらるべき筈なり。必竟詩歌は如何なる意味より見ても模倣的と限るべからず。さりとて美くしき衣を着けたる創作物なりとも斷言すべからざるなり。

かくて滿足すべき定義とては一もなく、或は詩歌は定義を付すべからずといふ者さへあれど、吾人は必しも然か思はず、研究の結果明かにこれを定め得べしと信ず。只研究に於て最も注意すべきは、謙遜の態度を持して、勝手の定義を造りて詩歌を其の範圍内に押込めんとせず、寧ろ詩歌自身の領せる地を測量

して、其の周圍に垣を造り、此處より彼處に到る迄を其れと定め、從來略々詩歌とはかゝる者ぞと漠然たる感を抱いて、知らず〳〵この語を用ひし人々をして、明かに其の本領を解せしむべきなり。今試みに吾人研究の結果を述べんか。

先づ詩歌には二つの別種の定義を要すべし。これ(一)廣義には彫刻、建築、音樂、詩歌何れも同樣の精神より成り、(二)狹義にては詩歌は全く他と異なれる特色を有すればなり。勿論この二種の定義は、互に他を補ふの力あり。扨吾人は如何なる定義を下すべきか。

一。詩歌とは宗教的理想の美はしき發現を云ふ。

二。詩歌とは感情を律呂的に現はしたる者なり。

この二つの定義を總括すれば、感情を律呂的にあらはし、自から美感を含み、而して宗教的理想の一貫せる者、これを詩歌と言ふとすべし。

此等の定義は尙詳しく說明せざれば了解し難からん。凡ての藝術が智に訴へずして情に訴へ、思想を其の本領とせずして感情を主とするは明かにて、思想を取扱ふことありても、其の思想が感情と連絡せる時に限る。從つてコールリッヂ又はウォーヅヲースの言へる如く、詩歌と反對せる者は散文ならずして科學なり。良好の詩篇には思想の滿ち溢るることあれど、其の思

想たるや、思想自身の爲に現はされたるにあらで、或る感情の爲に利用せられたるなり。時としては思想が根となり、感情の花其れより生じ、又時としては思想が花となり、感情が其の幹たることあれど、何れにしても感情が主要たり。思想の爲の思想は科學にして、感情の爲の思想、感情の爲の感情、これを詩歌となす。

故に詩歌は情に訴ふるの用意を以て作られざるべからず。シェークスピアが朝を敍し、

Co ! Where the morn, in russet mantle clad,
Walks o'er the dew of yon high eastern hill.

（見よ、朝は赤衣に包まれて、彼方の東の高丘の露を踏んで行くとの意）

と云ひし詩句も、これを朝を說明せる科學として見なば、馬鹿らしき者となるべし。又この詩句の意味のみを平叙して、韻律なき散文となすも、其の情味は失すべし。（和歌にても漢詩にてもこの理は一なり）、バイロンの「チャイルド、ハロルド」中に

The moon is up—but yet it is not night.

（月は上れり、されど未だ夜にはあらず）

といへる句あり。若しこれを字義通りに解すれば、三文の價値もなけれど、冥想に沈める人が其の感情を述べたりとせば、理

窟に合はぬ語が、一層の面白味をあらはす。卽ちこの語は事實を說くにあらで、已れの感情を他の胸に傳ふる爲に言はれたるなり。而してこの感情を現はすに於て、强く讀者の心を刺激する技術なくば、詩歌は平板となること多く、ウォーヅヲースの詩にはかゝることあり。殊に敍述的の詩歌には折々事實の目錄の連れるを見る。ソルヂャー曰はく「總てが活動し、又感情を有するは詩歌の公理ともいふべく、活動も感情もなき敍述詩は詩と稱すべからず、大詩人ホーマーの如き、一物も單に平敍したるはなく、常に活動せる樣を寫つす、アガメンノンの衣とか、アキリーズの楯とかを敍するにも、其の衣其の楯が生命ありて

活動せるが如くに寫つせり」と。ヘーゲルもこの理を說いて曰はく、「詩歌の材料は現在せる事實其物にはあらずして、事實を想像裡にて色彩を施したる者なり」と。

感情に訴ふるが第一の要件なるを以て、さま〳〵の字句上の裝飾の用ひらるゝに至り、比喩とか、擬人法とかの美辭法も起りしなり。この修辭は模擬者又は幼稚なる詩人によりて、頻りに用ひらるることあれど、眞に胸中の感情を色取るにあらずして、裝飾の爲に裝飾したるに過ぎざれば、醜婦の白粉を施したるが如く、見るに堪へず。眞詩人に至りては感情と文字と相合併して、殆んど分離すべからざるやうにして、光彩を發す。

The starry Galileo in his woes

（悲哀の中に星の如く輝けるガリレオ）

といふミルトンの語は、一言にして、ガリレオの不運なる一生と諸種の大發見を說き盡くし、黑暗々たる中に星光の燦く如かりしガリレオを想ひ出さゞるを得ざらしむ。此等の詩句を以て眞の熱情的辭句とすべし。血汐の滴るを雨に比し、美人を雪の肌などゝ形容するは、中學校の詩人等、詩歌製造家の常に用ひる所にて、凡の凡たる者なり。

詩歌は感情より出たる者なりとは、誰れも不同意を唱へざるべし。又其の感情を律呂的に現はさゞれば、詩歌と云ひがたきことも、明かなる事實にて、多言を用ひずして說き得べし。

散文も感情に訴へたるは詩歌といふべしとの說も可成りの信者を有し、又一面には地口駄洒落にても律呂的の唄は詩歌（ポエトリー）なりとする者あれど、共に非なり。內容もなく感情も含まれぬ律呂的の唄の、詩歌ならぬは言ふ迄もなく、散文は如何に美辭に充つるも詩歌と云ふべからず。元來律呂とは人によりて勝手に發明せられたる者ならずして、人心より流れ出でし固有の者にて、從つて感情を律呂的に現はすに及び、最も深く人間腦裡の琴線に觸るゝなり。ベートベン曰はく、「律呂は詩歌の感覺的生命にて、詩歌の內容も律呂によりて、感動を與ふる魔力を得」と。

吾人はウォーヅヲースの言の如く、詩歌と散文とは動物と植物と異なれる如き大差あるに非ざるを信ずれど、又自から兩者を混同しがたき差異の存ずるを認む。散文も感情に訴ふる者あり、詩歌的の文章も存ず。去れどこれを詩歌とは言ふべからず。或は韻語にて表はし得ることは、凡て散文にても表はし得と論じて、律呂的詩句を無用視するあれど、かゝる論者に向つては只、「香氣も美も忘れ、非實用の點も顧みざれば、キャベッも菫も同一なるべし」と答ふるに止めん。散文韻語非反對說のコールリッヂは、常に漠然たる議論を立て、詩歌と小說との間にも殆んど差別を設けず、只詩歌は全體に快感を與ふると共に、各部

分それ〳〵特殊の快感を與ふを特色とすといひしに過ぎず。されど彼れが演說と詩とを區別せし評論は、多くの價値あり。曰はく「詩歌と演說とは共に感情を現はす者なるが、後者は聽くべき者、前者は立聞きさるゝ者なり。演說は聽衆を眼中に置けど、詩人は聽衆の存するを意識せず。詩歌は孤獨の境に在りて、獨白をなし、心中の感情を自己の滿足し得る詞句にて現はし、演說は他人の心中に直に自己の感情を注ぎ込まんと苦慮し、其同情に媚び、其信念を動かさんとし、其の情を激せしめんとす」と。次いで又曰はく「大國民中最も詩人的技能なき佛國人が最も雄辯なり。而して佛國人は最も社交的にて、虛榮心に富み、

最も獨立心なし」と。この論によりてもコールリッヂは單に精神を見て形式を忘却し、藝術家の創作的精神を見て、藝術の作物を顧みず、動機のみに注意し結果を見落せる弊を免れざりしを認む。吾人は律呂の有無を以て詩歌と他の藝術とを區別せんとし、コールリッヂの如く動機にのみ注意して、他と分つの當を得ざるを信ず。

扨て廣義の藝術の定義たる「宗教的觀念の美はしき發現」とは如何なる意味かと尋ぬるに、先づ「美はしき」といふ語義より說かざるべからず。「美はしき」に代へるに「快き」を以てするも可なり。美といひ快といひ、藝術品に缺くべからざる要件たるは、

萬人の疑はざる所なるべきに、案外にもこの要件か批評に於て顧みられざることあり、不快にして醜なる者も難ぜられぬことあり。ヂャーン、ポール曰はく「藝術の世界は最も高く最も理想的ならざるべからず、其の世界にてはさま〴〵の苦悶も、一層大なる快樂によりて消滅せられ、地上の現實界に激しく吹き荒るゝ大嵐も、春風の面を撫する程に感ぜらるべき也」。と。調べの整へる樂を聽き、優秀の詩を讀めば、內容の悲哀なるにも關はらず、人心の洗滌さるゝ心地するは、この理に由り、藝術の「美しく」「快く」感ぜられざるべからざるも推知すべし。從つて讀者の實感を挑發するやうの言語、卑しき連想を起さしむる

如き辭句は、全々排斥するを要す。今日かゝる下品の詩句を莊重の題目の下に用ひたる似而非詩歌甚だ多し。

次ぎに「宗教的思想の發現」について論ぜんか。古來東西を通じて、何れの國にても詩歌の存せざるは無し。この普遍的存在は深き意味のあるに非ざるか。或は詩歌は單に娛樂に過ぎざるか。或は無聊の筆すのみに止まるか。此等の說、頭腦の枯渴せる論理學者の肯定する所にて、藝術を玩具同樣になさんとせしが、次第に其の誤謬は認められつゝあり。デクインシー曰はく、「耳目の受くる快樂は藝術の目的の一つにして、快樂を與ふる力なくては、藝術は全く活動せざるべし、されどこれを以て其

の眞正の目的と見做すは大なる誤にて、偶々其の論者の無思想を證明するのみ。食物は單に味感を喜ばす爲に必要なりと云ひ、其の體力を增進し、健康を保持する等重大の目的あるを忘却すると同じ誤謬なり。畢竟快樂は手段に過ぎず。」と。

獨逸及び佛蘭西にて屢々唱道せらるゝ「藝術としての藝術」の說、藝術は其自身の外に一の目的なしとの論は、藝術を單に娛樂の具となすよりも稍々優れども、これも不完全にて、手段を目的と混同したる弊あり。吾人文藝の歷史を觀察するに、何處にも動かすべからざる重大の要素の存在するを見る。これ即ち藝術の精神にして、宗教的觀念なり。凡ての詩人皆其の時代の

頂上に立ち、一面時代の嬰兒たると共に、一面又豫言者たり。而して其の歌ふ所は、各自の感情の相違によりて異なれども、志す點は一つにて、其の時代の國民を一層高き思想界に引上げんとするにあるなり。スコット曰はく「古代の詩人も其の感興に乘じて、歴史、法律、宗教を歌ふ。而して如何たる野蠻の民も其の唱歌者に耳を傾けて、祖先の冒險を追想し、道德、法律の敎を尊敬し、神佛を讃美するの心を起すに至るなり。」と。されば詩歌を「永久に眞正なる思想を寫つせる鏡」とするよりも、寧ろ「時代の眞理を寫つせる鏡」とする方勝るべし。詩人は其の屬せる時代を通じて觀察するも、其れを超越する能はず、從

つて其時代の最高の智識と精神とを發表するに至るなり。されどこれも正確とは云ひ難く、眞理は常に變化するを以て、永久の眞理は何なるかを定めん由なし。只永久に變はらざるは、人間の情緒にて、詩歌はこれを目指して作らる。野蠻人の軍歌も詩なり。古のアラビア人は英雄の剛勇善行を唄ふを慣ひとしたり。古代第一の詩人ホーマーは榮譽とすべき行爲、敬畏すべき運命を、詩の精神と明言せり。巡廻詩人ヴイダルは詩歌を以て人世哲學の寶庫となし、高潔の心情を養ふ最大機關となせり。吾人此等各時代の大詩人の言に鑑み、又古來東西の大詩篇を通讀するに、詩歌の道德的感化を有するを感ぜざるを得ず。而し

一

てこの道德的感動力を分析すれば、宗教的觀念となるなり。宗教的觀念と云ふも、各時代の有形の宗教を言ふにあらず、規定されたる教理を言ふにあらず、吾人の社會的關係を、一層完全無缺の狀態に進めんとし、又無窮の宇宙人世を、嚴かに冥想せんとするの心的態度を指して言ふなり。かくて自由、平等、人道（近代の三大思潮）は近時の有形の宗教の教理にてはあらねど、全歐洲の目指せる理想にして、人世の目的を完全無缺とせんとの志を顯はすを以て、明かに宗教的觀念と云ふべきなり。

茲に注意すべきは、この定義を狹隘に解釋し、輕卒に應用せざることにて、詩人は哲學者の如く露骨に其の觀念を言ひ現はす

べき者にてもなく、又其の觀念を意識する必要さへなし。且つ吾人は觀念といふ抽象的の語を用ひ、一時代の全精神を意味したるつもりなるが、この一語の中には、さま〳〵の要素を含有し、從つて或詩は其の中の一二を有するに過ぎざることあり。

詩歌史上に著るき現象は、宗教との關係の深きことにて、殊に古代の詩には讃美歌、神佛の物語、祈禱、來世の渴望等最も多し。ウルリチ曰はく「文藝美術は宗教と起原を一にす、これその神聖なる所以にして、間接の神の默示なり」と。啻に起原のみならず、其の精神に於ても同樣にして、文明の進むに從ひ、其の神聖の職分より離れたる如きも、そは表面のみにて、兩者

の目的は相反離すべからず。宗教の宗教たる所以は深遠の教理を信ずるよりも、其の實行に敏なるに在り。信條のいろはを行爲にて現はすに在り。かくて人類の本能のまゝに慾情を恣まゝにするを制し、高尚純潔の境に導かんとするを要とす。此の如き又詩歌の目的とする所にて、美はしき徑路を通じてこの目的を達せんとするなり。宗教が教訓を列べて人心に命ずるに反し、詩歌は美によりて人心を魅し、彼れは斷食、祈禱、懺悔の手段によりて靈魂を清くするに對し、これは情緒の力にて靈魂を清くせんとす。宗教とても情緒の力を借ることあれど、其の時も旁ら理解力、即ち智の働きによりて助けられざるべからずして、

半ば哲學的たるを免かれず。マゼンヂは情慾を定義して、「五臟六腑が理性に打勝ちたる狀」なりといひしが、宗教と詩歌の本領は人間の靈的部分が肉體に打勝たんとするにあり。ロース曰はく「詩を讀めば力を籠めたる道德の聲を聞く心地し、心に染み渡るを覺ゆ」と。又ミカエリスは論じて云ふ「或詩は單に快感を與ふに過ぎざれど、そを非難して劣作なりとすべからず、道德的教訓を含まず、美德を賛稱せずとも、平凡の思想を美はしき詞句にて現はしたるも可なり。吾人の面前に自然界の山川風物を活現せしむる詩歌も尊むべし」と。このミカエリスの論は、なほ淺薄なるを免かれず、かゝる詩歌も既に詩歌たる價値ある

以上は、露骨に直接に道德的眞理を說かざるも、間接に道德の理想と合せるなり。勿論詩人は道德論者にあらず、道德的神（インスピレーション）興を來すの人なれば、詩中一言も敎訓を垂れざるもよし。且つ詩歌は凡て叙事體たり脚本體たる必要もなく、星を詠じ、螢を歌ふも可なり。是等小さき光も大自然の一部分を形造れるを以て、宗敎的大思想の一端は其中に宿れるなり。既に宗敎に用うる讃美歌にすら、單に優美の快感をあらはせる者ありて、神佛崇拜の際に用ひらるゝにあらずや。

藝術の目的に關する獨逸大學者ヘーゲルの意見は最も耳を傾くるに足る。曰はく「藝術の目的は情緒知能等人心に存する者を、吾人の感覺にて感じ得させんとする也。人間の七情も讀者の面前に形を備へて活動するに至る也。人心を廣くして、善惡悲喜、恐ろしき者、樂しき者等を明瞭に會得せしめ、吾人が現實界にて經驗せざる樣々のことを、さながら經驗せるが如くならしむべし。」と。彼れ又曰はく、「涙にも慰籍あり、人間の悲哀に沈む時は其の苦痛を言現はんとする傾あり、詩歌繪畫音樂に於て其の現はされたるを見ても、大なる慰籍を得べし。かくて自己の悲哀の具體的になれるを見下し、さながら自己と離れたる事物に接するの感を起し、胸の重荷の輕くなる心地すべし。」と。

詩歌は娛樂以上の目的を有し、ある理想を有すれど、決して

道德の敎師と云ふべからず。「この一篇の敎うる道德は如何」との疑問は屢々發せらるゝことあれど、其の答は大抵答者自身の偏見に過ぎず。又たとひ詩歌より好敎訓の例を見出し得るとも、其の好敎訓が其の詩歌の生命たるには非ざるなり。

宗敎、哲學、詩歌は密接なる關係あると共に、各異なれる形體を具ふるが、世上一般に其の異なれる點を其の物の精髓と信ずるが如し。吾人はこれに反してこの三者は理想の三樣の形體にて、其の實質は一なりとし、只其の發現の姿の異なるにより て、精髓まで異なるが如く思はれしに過ぎずと信ず。ヂユーフロイは詩と哲學を比較して曰はく「詩歌は眞善美に關する時代

の感情を歌ひ、たとひ明晰を缺くも、生々せる樣に公衆の思想を言現はす。この思想を强く感じ、多く理解せざるを詩の特色とし、其の思想を解するを哲學の特色とす。若し詩歌に於て、これを解釋せば、其の詩は哲學となりて、詩とは言ふべからず。眞正の詩人は常に其の時代の嬰兒として感ずるのみなれど、哲學者は其の感情を分拆し、整列せんとす」と。カーライル曰はく「詩歌の歷史を著はすは、人間が宇宙の精神を如何に感得せしかを記すに等し、各時代の詩人は如何なる態度にて、燦めける美の光を捕へたるかを見るは、詩歌史の任務なり。而して其の美の光の最も純潔なるは宗敎にして、眞正の詩人は或度に於

てこれを有せざることなし、」と。ヘーゲル曰はく「藝術の最も秀れたるは、其れが宗教及び哲學と共通の地に立てる時に在り。藝術によりて、國民は其の最も神聖最も深遠、最も豐富なる觀念を現はしたれば、一國民の宗教と哲學とを解せんとするには、藝術の鍵を用ひざるべからず」と。シエレーは其の著「詩歌の辨」に於て曰はく、「詩人は國語、音樂、舞踏、建築、彫刻、繪畫の創始者なるのみならず、又法律の制定者たり、人生の教師たり、美と眞とに人を導き、宗教と呼ばるゝ見えざる世界の一端を示さんとする教師なり。……古代に於て詩人は立法者、又は豫言者と云はれしが、本來此等二者の性質を併有せるなり。

彼れは今日の事物中に、法則を發見するのみならず、今日に徵して將來を洞察し、其の思想は花の蕾の如く後日に花咲き實を結ぶ。……詩人は大國民の目を醒ます際の先鋒たり。……詩人は今日の内に宿れる明日の影を寫つすの鏡なり。……詩人は隱然世界の立法者なり」と。以上諸學者の說それぞれ異なれども、何れも詩歌の宗教的理想の美はしき表現たるとのみは隱然首肯せるが如し。詩人は一時代の大教師にして、神聖なる祭壇の前に立ち、同胞の熱望、感情、希望を歌ふなり。美はしく音樂的にこれを歌ふなり。宗教家は人に眞と善とを命じ、哲學者はこれを證明すれど、詩人はこれを愛慕せしめんと

す。詩人は讀者の前に剛勇忍耐煩悶の例を活寫し、讀者の心中、或は周圍に存在せる精神的財産を指示し、又讀者をして自然と對話し得るに至らしむ。彼れは將來の、過去よりも光明なるを敎へ、又今日よりも幸福なるを知らしむ。讀者の眼より利己主義の膜を取拂ひ、影を見せ、宗敎の目標を眺めしめ、幸福の泉を汲ましむ。

若し吾人の說の誤謬にして、詩句の下に一の思想も潛在せず、詩歌は只感情の爲に感情を述ぶるに過ぎずとせば、何故に各時代を通じて絕えず同樣に詩人の出でざるか。詩歌の波線的に一盛一衰し、數世紀間全く眠れるが如く、或時期に達して大に興

隆するは何故なるか。これを偶然に歸するは甚だ便利なる論法なれど、薄弱なるを免かれず。歷史について觀察し、詩歌の盛衰の規則正しく、歐洲全體を通じて一貫の理法あるを知らば、容易に偶然とは云ひ難かるべし。藝術の最も盛なるは奢肆贅澤を極むる泰平無事の日に在らざるは、屢々唱へられたる所。文化燦爛たるアゼンスの時代は國民の最も活動し、苦悶したる時なり。ダンテとペトラークの當時は、伊太利人が戰爭と政治上の紛亂に、寧日なかりし時なり。エリザベス及びゼームス朝の英國は、新敎徒の苦鬪せし時なり。佛國革命後の文學隆盛も同じ道理なり。蓋しさま〳〵の革命起り、人心の動搖したる時は、

新しき信條の必要の感ぜらるゝに由るならん。而して詩人はこの信條を言現はし將來の希望を歌ふなり。元よりこの新理想を露骨に表はすに非ず、又完全に理解し、殘る隈なく歌ふにもあらず、只其の理想の一面を感ずるに過ぎざることあり。從つて多數の詩人が諸方面より歌ふ必要あり。ウォーヅヲース、コールリッヂ、シエレー、バイロン、ロヂャース、カメル、キーツ、モーア、クラッフ等がそれ〴〵其の異なれる立場より時代の理想を歌ふに至りしも宜なり、この理想は作者一人の創始したるにあらずして、多數の國民の抱ける者、一日に發生せしにあらずして、一時代に育成せられたる者といふべく、大詩人は人並

以上に、これを感ずれども、一人にてもそれを完備すべくもあらず。されば國民の哲學宗教を解するの鍵は詩なりとのヘーゲルの說を逆にして、一時代の哲學的理想を鍵として詩歌を解すべしとも云ひ得べく、前代の詩を批評せんには、其の時代の主要の理想を明かに認めざれば、正鵠を得んこと難し。

今日智識の普及につれて、歌詩の流布するは喜ばしき現象にて、たとひ直ちに作られて直ちに忘らるゝ詩篇の出現するは厭はしき傾向なりとも、詩歌の感化力の增加は賀すべき事なり。上代に於て宗教は只二三の僧侶によりてのみ傳道せられ、少數人にのみ理解せられしが、基督教の發達するに從ひ、多數人に

理解せられ、實行せらるゝに至りき。詩歌もその如く、其の任務、其の勢力を擴張して、次第に人生缺くべからざる重大の要素となりつゝあり。これを知らずして、「詩歌は既に死せり」「詩歌は無用の長物なり」などゝ叫ぶは愚の極といふべし。否詩歌は決して死せず、其無用の長物にもあらず、殊に日々新作家を出し、新詩篇の出づる今日に於てをや。元より現今は人心を奮起せしむる新理想のあらざれば、赫燿たる光彩を見るべからざるも、着々として其の任務を盡くせるは否むべからず。かくて世界はます〳〵唱歌者によりて美化せられ、詩歌は人生に缺くべからざる一要素となり、一詩を味ふの感覺は耳目口鼻にも優

りて重大なる者となるべし。藝術に表はれたる理想の境に人生を導かんとするは、或は一場の夢ならんも知れねど、こは貴ぶべき夢なり。ゲーテは「日々詩篇を朗吟し、繪畫を弄び、小唄を聽き、小時間趣味ある會話をなすべし」と勸告せしが、かくて精神の調和を計るは美はしく且つ尊ときことにて、モンテーンの父は毎朝笛の音にて眠を醒まし、快く一日を送るの準備をなせりといふ。而してゲーテのいへる如く「自から解せざる者を我が物とし能はず」とすれば、詩歌が富人の專有物たらずして、群衆の必要品となるにつれ、ます〳〵詩篇を理解せしむる手段の必要あるべく、從つて審美學と批評とは輕ずべからざる

に至る。實に批評は詩歌を理解せしめ、感受せしむる任務を帶ぶるなり。

世上或は獨創力を以て無學より得らるゝ者とし、學識も批評も詩才の活動を妨ぐるが如く思へど、こは大なる誤なり。學問にも種々ありて、書庫の塵埃を吸ひて足れりとするあり、古代の書籍を繙くことのみ能事とするあれど、この以外にも學問の方法あり。シエークスピアは希臘語に精通せざりしも、當時の學問思想を味ふを怠らず。智織慾極めて盛にして、高下尊卑の凡てを集めて自家藥籠中の者としたりき。ゲーテは言ふ迄もなし。ホーマー、ダンテ、スペンサー、ミルトン、シエレー、コールリッ

ヂ等近古の諸詩人は各其の時代相應に得らるゝ限りの智識を吸收せり。蓋し彼等時代に先づるの徒が智識に於て世人に劣りて可なる所以なし。

學問は天才を沒了するとか、藝術家は其の作について不注意なれとか、批評は創作家を妨害するとかの愚論は文學藝術の歷史によりて悉く否定せらるべし。大傑作は幾年月の永き鍛錬を經て始めて完成するに非ずや。ダンテは決して其の作に對して不注意ならざりき。彼れは「神曲」の爲に瘦せたりといへり。カーライルも創作の苦を訴へたり。チョーサーにせよ、シエークスピアにせよ、古來の大作家にして刻苦精勵せざりしはなし。ア

リオストは十二年間の苦心にて「ヲーランド、フリヲソ」を著はしたる後、其れに對する批評家の言を聽かんとて伊太利全國を旅行したりといふ。藝術家既に一大目的を有して立つ。其れを完成して無缺の物とせんには、自からこれを批評するのみならず、又他人の注意に鑑みるは當然なり。殊に一代の思潮理想を示して、天才の向ふ所を示すの大評論家は、最も今日の文壇に必要なるなり。

＊　＊　＊　＊　＊

この一篇、英人リユーキス氏が「藝術の生命」と題し、英國文壇に審美學及び批評の振はざるを慨し、其の輕んずべからざるを說き、又詩歌の何物たるかを論じたる所の大意を摘譯したる也。西洋の詩歌は、日本の和歌、漢詩、新體詩等の如く、短かき者のみならず、戲曲、叙事詩等、文學の大部分を網羅せり。されば玆に所謂詩歌の生命をば、日本の文學に適應せんには、廣き意味にて解し、文學全體に對したる意見とするも可ならん。今日の日本の文壇にも、文學を以て單に戲作と見做し、譯なく讀者を面白がらせば足れりとするあり。又これに反して露骨に哲理的思想を歌ひたるを、大文學とする論者あり。兩者何れも非にして、「文學は理想を美はしく現はしたる者」なりとのこの一篇の論旨は、最も當を得たる文

學の解釋にあらざるが。

此の論文の終には希臘より獨逸近代に至る美學說の簡單なる說明あれどさして必要なられば之れを省略したり。

附錄畢

明治三十九年五月三日印刷
明治三十九年五月十日發行

文學訓

著作權所有

定價金三十錢

著者 長谷川誠也

東京日本橋區本町三丁目八番地
發行者 大橋新太郎

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者 飯田三千太郎

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

文學士 大町桂月君著

（博文館發行）

學生訓

全一冊　正價金貳拾錢　郵稅金四錢

桂月先生曩に道德實踐法の著ありて道德の大綱を說かれ今又此の著ありて青年學生の學問と躬行とに資せらる乾燥なる小言の比にあらず文章は精勁にして流麗普通文の好模範なり學生諸君一本を備へて座右の銘とせざるべからず敎育家又參考の好資料なり

續學生訓

全一冊　正價金貳拾五錢　郵稅金四錢

青年學生諸君の友となりて學藝上實行上、敎導し、忠告し、訓戒するもの、學生訓是也。

續學生訓出でゝ、更に一の益友增したり、言ふ所氣が利きて穩當、文趣味ありて雄健、一讀たゞ卷の終はるを忘る、苟も志あるもの机上此書を缺くべからず。

文學士 大町桂月君著

（博文館發行）

處世訓

全一冊　正價金貳拾五錢　郵稅金四錢

今や社會は智育以外品性の陶冶を望むと切也才力材能の人以外品性ある人士を求むるに至れり而して品性の敎育は學校敎育にのみ任ずべからず此書や靈犀の眼縱橫の筆を以て學に志し道に志し世に處する者の木鐸となり指導者となり鼓舞者となり今の社會の心靈上の渴を醫するも早天の雨も啻ならざるものあらむ。

青年訓

全一冊　正價金貳拾八錢　郵稅金四錢

桂月先生少年氣鋭文筆犀利にして頭腦透徹其措辭に富むこと當代に名あり本書は自ら青年の友となり極めて愼重の思考を凝らし椽大の筆を弄せらる彼の道德先生が難澁なる言語を弄して些の利益なきの比にあらず世の青年諸君は必ず一本を携へ以て日常事物に接するの資に供せられんことを。

文學士 大町桂月君著

(博文館發行)

女學生訓

全一冊　正價金貳拾五錢　郵稅金四錢

家庭以外學校以外の女子教育家桂月先生が獨特の奇警なる觀察を寓し趣味津々として乾燥無味なる小言の比にあらず讀んで面白きが上に女子百般の事に關して適切なる訓戒を垂れて女子教育上の指南車たり又木鐸たり世上の女子は更なり娘を有せらるゝ父母も必ず一本を備へ玉はざるべからず。

軍國訓

全一冊　正價金貳拾八錢　郵稅金四錢

一隻の烱眼時勢の表裏を洞察し日露戰爭の由來を明にするのみならず、日本の國是を說き、特長を說き、其說く所警拔にして痛切、行るに縱橫靈活の筆を以てす苟くも國家の憂を解して、今後日本國の爲めに盡さんとするの士は必ず一讀せざるべからざる好著なり。

故文學博士 樗牛高山林次郎君著述

時代管見

全一冊　定價金三十六錢　郵稅金六錢

是れ高山博士が當代の時勢觀察及び評論七十餘編を收めたるもの道德、宗教、文學、美術等凡て國民的人文を經緯する。諸般の要素に對する著者の意見略々茲に現る思想混亂の今日、敢て江湖の一讀を請はむ。附錄『わが神の記』は文人ならぬ著者が一流の美文なり。

第十版

文藝評論

全一冊　定價金三拾錢　郵稅金六錢

文學美術を評論品隲するに於て別に雙眼を具せるは江湖の既に知悉する所なり。本書は著者が多年研鑽攻究の餘に成れる、論文を集めたるものにして滔々數萬言に渉れる雄篇あり、寸鐵人を殺す底の小品あり、或は文を談し詩を說き、或は史を論じ畸を品す、或は紀餘淡蕩を以て勝り、或は把羅別抉妙を見る、春風の溫なるが如く秋霜の嚴なるに似たり。而して之を行るに明快通暢一たび繙かば必ずや手の舞ひ足の踏むを知らざるものあらんとす。

第六版

東京
日本橋本町
博文館
發兌

1/40

文學士　大町桂月君著
美文韻文　**黃菊白菊**
全一冊　正價金廿五錢
洋裝　郵稅六錢

桂月先生の文は、蠻貊を動かすこと已に久し、悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く、哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に叫ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗にして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし、感情を純潔ならしむ。實に美文韻文を學ふ者の好模範たり。讀書家の燈下、この絶好可憐の册子なかるべからず。

文學士　井上晩翠君著　**天地有情**
正價金廿五錢　郵稅金四錢

娥々の山洋々の水以て晩翠君の詩を評すべし此集君が今日迄の吟哦を錄してこゝに美麗の册子を成す新躰詩中別に一族幟を樹立するもの詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず請ふ愛讀を賜へ

大和田建樹君著　散文韻文　**雪月花**
正價金廿五錢　郵稅金六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は、優雅流滑奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆となす、此編收むる所、近作無慮二百篇、蓋し文學界中の旗鼓たるものなり、

文學士大町桂月君著　**大絃小絃**
正價金三十錢　郵稅金六錢

大絃急雨の如く、小絃私語の如しとは、獨り琵琶の聲のみならんや、才氣潑溂筆力縱横、觀察亦奇警にして鋭利なるは著者の文なり以て普通文の模範とすべく、以て作文の指南とすべし。

鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三君合作
美文韻文　**花紅葉**
全一冊　正價金三十錢
袖珍　郵稅六錢

天に春花秋葉の文あり、人間亦美文辭なかるべけんや、鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月、三文學士の文名、夙に江湖に傳ふ、今其錦心繡腸吐いて美文となり、發して韻文なれるもの、凡そ數十篇、集つて此の册子にあり、才華爛發、紙上珠を聯れ、地に擲てば金石の聲を發せんとす、洵に花と紅葉を一時に看るの心地すべし、明治文壇の奇觀たると、言を待たず、天下文を好むの士、願くは一本を備へて、讀誦に資せられよ。

大和田建樹君著　散文韻文　**藻鹽木**
賣價金廿五錢　郵稅金六錢

（漫筆）家の正月○歌かるた○若菜○紫の被布○春の野○朝霧○衣がへ○故郷の盆○秋のなごり○竿つべ○外七十二題（韻文）千代の初花○切れたる糸○蝶の乙女○磯の火影○外二十四題（紀行）つくも髪○北ゆく雁○浦風山風○外八題

文學士大町桂月君著　**一蓑一笠**
正價金三拾錢　郵稅金六錢

桂月先生筆に健にして又脚に健也閑あれば即ち筆を裁せて天下の名山大川に遊ひ興到りて筆を下す筆致雄壯或は優婉花の如き美詞となりて本書成る達意暢達の佳篇は本書其解の虛ならざるを知るべし

文學士武島羽衣君著　美文歌文　**霓裳微吟**
正價金廿五錢　郵稅金六錢

秋風吟○人生○海櫻の歌○君を忘れん○優美と崇高○新年雪○甥を失ひて○海櫻晴望○雲の音なひ○さゞれ水○わが故郷○牧兒の歌○戀○涙○鹽濱ぶれ○秋と春○小夜砧○魂まつり○おとめ塚○外三十餘題

大町文學士、久保文學士、大田淳軒君共編

新式いろは引節用辭典 正價貳圓 小包送拾五錢

▲總皮特製 正價貳圓五拾錢 小包送拾五錢

博文館編輯局編纂

傳家寶典 **明治節用大全** 正價壹圓卒錢 小包送貳拾錢

少年世界編輯部編纂

明治少年節用 正價七拾五錢 郵稅八錢

內山正如君著

新撰日本節用 正價壹圓 郵稅拾錢

博文館編輯局編

眞草 **いろは早引節用** 定價貳拾錢 郵稅六錢

文學博士高山樗牛君序

醉夢西村眞次君著

美文韻文 **創作要訣** 全一冊 巾列美本

賣價 金拾貳錢 郵稅金六錢

本書は青年文學に志すものゝ爲に著はしたるものにして、綱を總論、美文の作法、韻文の作法、結論等に分ち、美文並に韻文を創作するの要訣を說示せり、世には此種の書少からざるにあらず、而も根帶を修辭學の上に置きて、親切丁寧に作法を說明し、諸大家の文を引いて一々例を示したるなど、本書の特色となす所なり、殊に詩の解釋、小說紀行文等の說明、韻文の創作法等は、著者が古今の學說を咀嚼して、新たに案出したるもの、之を讀まんものは、單に文章の作法を知るに止まらずして、文學の一班を解するを得可し。

70
121

421

084812-000-2

94-421

文学訓

ジー・リューキス／著

M39

DBA-0157